

の如く、決して突然な出來事ではなくて、當然出來るべきものが遂に來たのであるにすぎぬ。元來我國に於ける大學に地理學科の創設以來、各國の地理學的思想はその本質的使命に従ひ、急速に紹介されるが常であり、又特に大戰以後の國際主義的風潮は、かゝる傾向を助長し、その複雑微妙なる動きをも敏感に傳へられた。既述の如く「ヘットナー的轉回」の先觸れは既に昭和四年以來我國にも輸入せられ、又新歸朝者佐藤弘氏、田中秀作氏の活躍、飯本信之氏の紹介、特に縮貫勇彦氏の方法論的研究によつて、一群のヘットナー學派の地理學者が生育されつゝあつた。石田氏の所論はかゝる基礎の上に出發せる充分根據をもつものであり、單に一朝一夕の「作文の練習」ではなかつたのである。特に氏の奉職校である東京商大には「人間解放」の我國に於ける鼻祖佐藤弘氏、オットー・グラフの研究者國松久彌氏等の新人が同居し、恰も一廓をなしてゐた。かくの如き論理的基礎の上に立つにも拘はらず、多くの反對者に遭遇せねばならなかつた理由は、それが自然主義的地理學の否定であつたからである。明治中期以來の傳統に立つ自然主義を否定し、人間主義的地理學への轉換を要求する既成陣營への挑戦であつたからである。

この衝突はその性質上途中で打切られ、その當否は時代の成熟に委任された形になつた。然しその餘震はやゝ暫く續けられ、今村學郎氏の時代にプロテストせんとする多くの研究に現はれた。然し自然主義に對する盲信を失つた多くの地理學徒は靜かにその根本に遡ほり、地理學の本質、それに伴ふ眞面目な發達史の研究等が行はれ、急速にその安定が求められて行つた。本書の起原も實はこの苦惱の解決に遡る。

まづ當面の問題となつた「地人相關論」の本山、京都學派に於ては小牧博士を中心として再建が進められ、別技篤彦氏、松井武敏、寺田貞次氏等の眞面目な報告が送られ出した。元來京都學派は内田銀藏博士の歴史觀の導入以

來、環境論は當初から批判的であり、人間主義への轉換はその歴史性を契機として存在してゐた。従つてその地域科學への變貌の準備は既に整へられてゐたにも拘はらず、自然主義の爛熟時代の前にその新芽は生育せられず、只管「法則科學觀」に妥協してゐたのであつた。然しこの一大變動を契機として京都學派はその本來の地域的研究を復古し、地誌的方法論が新しき線に沿つて吟味された。

かゝる影響は獨り京都學派にとゞまらず、我國に於ける地誌の本山文理大學派にも及んで行つた。元來フランス流地理學の正系を以て任ぜられた田中教授の思想的根柢には人間主義への轉換の鍵が早くより秘められてゐた。田中教授の「中央日本の人文地誌學的研究」はかゝる地域學派擡頭への世評に應へんとする意圖の現れでもあつた。然しその方法論は柴三九男氏の酷評を待つまでもなく、時代の未成熟とは言ひながら自然的であつたことは事實である。さりながらその類型化への開拓、地域性への偏向の過程は自然主義的であつたとは言ひながら、その方向として決して誤りではなかつた。たゞ人間中心主義的方法論への飛躍のためにはまだ時代は充分成熟してゐなかつた。然し石田氏の所論は教授の方法論的修正を善諾せしむる最もよき契機であつた。早速その響きに應ずるが如く、昭和八年三月「再び獨立科學としての地理學」を發表し、「人文現象の要因として從來自然現象を偏重したのに對し、現在は人文的環境をも著しく重要視するに至つた」と述べ、更に四月雜誌「初等教育」に「最近地理學の進歩」の一文を寄せ、地理學は人文地理、特に人文地誌であることを説き、人文現象の成因につきて「自然現象のみに歸する場合もあるかも知れぬが、多くの場合他の人文現象が成因となつてゐることが多い。」「從來の地理は地人相關を説いたが、最近は人地相關、人々相關が地理學考察の主要點となつて來た。」と鮮かな轉向ぶりを見せられた。これが

教授の第三段階の變貌である。その全面的な抱負は天王寺師範に於ける講習會の席上示されてゐる。即ち地理學は地誌であること、地誌は大小の地理區の地域性を闡明することであり、地域性とは各地域に於ける地理學的個性である。その研究に當つては統計又は實證的な實地踏査により、材料を蒐集し、之を地圖化、グラフ化し、之を數種のタイプに分ち、まづ人文現象の分布を認識することである。とりもなほさずかゝるプロセスを経て定立せられたるものがその對象である。次にこの人文現象存在の理由を説明し、所謂地域性を闡明ならしめねばならぬ。その方法は人地相關又は人々相關の理法に據る。前者は現象と地形・氣候・生物・土壤等の自然的要因との關係を求め、後者は人文現象と他の人文現象との關係を論ずるものである。この兩法によつて現象の立地的原因を正しく認識することにより、研究地域の個性を明瞭にせねばならぬ。この個性探究のために對比が行はれ、南北性、東西性、共通性、特異性が論ぜられる。かくして地誌の目的は終結する。従つてその記述に當つては、まづ序論として豫想としての論述範圍及び論述態度を書き、本論に入つて最もよく地域性を表現する意味に於て米作地域、麥作地域、果樹地域等の農業地域を論じ、次に牛、馬、豚、鶏等の牧産地域、寒帯林・濕帯林等の林業地域、漁類分布の水産地域を論じ、以上の原始産業はその各々につきてその種類、量的分布を究め、次にその分布の立地的要因を人地、人々關係から考察せねばならぬ。この際東西性、南北性、共通性、特異性等を對比して、その個性を明瞭ならしめねばならぬ。かくして次に工業に入り、工場の分布、及び工産物の特徴を明かにし、在來式か、近代式か、交通關係等に留意してその進化過程を示し、その立地的要因を理法に従つて明かならしめ、次に道路及び鐵道の交通網を論じ、産業・交通の兩者よりその取引關係を商圏につきて論じ、最後に聚落及人口密度の項に於て、

中心聚落及び特色ある聚落につきて産業、交通、商圏等の關係に於て説明し、あらゆるもの、總和としての人口分布、密度、増減、異動等につきて論じなければならぬ。結論は法則が結果として求められたのでなきが故に、各項の要約を示せば足りる。と言ふのであつて、これが教授の地誌觀の全貌となつたのであり、圖式となつたのである。此處に於て教授の圖式は完成するのであるが、注目すべきことは教授も佐藤教授と共に、地理學をして純粹説明科學へ變貌してをられることである。人間主義的變貌の色彩がかゝる結果へ導いたのであるが、その後の人間主義的發展はかゝる自然主義の修正程度に満足せずして、人間のもつ「自發的意志」を中心とする「理想主義」的再組織、再建設に向つて變貌することとなるのである。

震源地に位置してゐた佐藤教授は、「經濟地理學總論」を送つてその宿望を達せられた。曰く「地理學は社會現象をその地域に於て、交互作用の觀點から説明するものであるから、よし地理的條件は見掛上固定的なものとして變化がないとしても、社會條件は絶えず著しく變化するのであるが故に、この交互作用それ自體が時と共に常に變化し、従つて社會的現象も常に變化する。だからこの間に一定の法則を定立することは殆んど不可能である。」と。まだ石田氏の如く社會學的基礎理論の上に立ち、地理學は流轉輪廻を續けて休むことなき地域的個性を、假に或時、或場所に止めて、これを自然的、社會的兩側面の交互作用により説明し、更にかゝる現象の時間的、空間的關係を知るために過去の時間的運動の或時に遡り、又全體的な他の地域との「かゝわり」即ち聯關を知ることによつて、始めて地域の個性を因果的即ち科學的に説明し得ると言ふにあり、この巧みな説明こそ地理學なりと主張される。又自然科學はその結果としての法則が大切であり、過程としての説明は副次的であるが、地理學に於てはその

結果は既に與へられてゐる事實であり、むしろその過程であるべき説明こそ本質的なものであるとて、完全に地理學の説明科學觀に成功されたのである。かくてその説明體系の組織化、論理の精緻性が完成されて行くのであるが、それはたゞ増々因果の系列を以て把束され行くに過ぎなかつた。元來時間的な「流れ」自身を或瞬間にとゞめて分析することは「流れ自身」の認識ではなくて、單なる水の分析的認識である。又空間的な有機的聯關を、たゞ機械的に如何程比較して見ても、それは單なる形態的な比較以上に出でられない。そこには時間單なる瞬間の連續觀があり、空間は單なる物質の集合であるといふ機械的自然觀は嚴として存して居る筈である。要は人間の主體性即ちその「自發的意志」を中心とせぬ限りその根本的改革は困難である。

かゝる變貌の中にも辻村助教を中心とする東大にあつては、その鋭鋒の肉薄にも拘はらず、恰も驚きを忘れたかの如き静けさを以て、明治以後の理學的傳統を保守されてゐた。抑々景觀地理への變貌そのものが、ヘットナーへの接近の如きも、その機械的自然觀の根源的立場が否定されぬ限り、法則科學たると、説明科學たるとの差異は殆んど問題にならず、従つてその變貌は不必要であつたのである。加へて米國の地理學的傾向の中に貴重な經驗をもつ渡邊光氏の歸朝以來、景觀地理の科學的建設はその巨歩を進めつゝあつた。恰も氏の報告は石田龍次郎氏と共に地理教育誌上に發表せられ、地域科學の對象たるべき「景觀」が、科學性をもつためには單元性の上に立つべきであるとの自覺の下に、景觀を構成する各要素を分析し、その統一を系統的な進化に求め、景觀全體の發達をそのプロセスに於て認識せんとする發達論的研究にその力點が注がれた。辻村助教はこれ等の動きの中に靜かに景觀地理學建設へとあらゆる研究を續けられてゐた。

地域論の提唱者の一人であり、且つこの方面の雄力なる推進力であつた飲本信之氏は、恰も外遊の途次にあり、その卓抜なる新思潮は拜聽することは出来なかつた。

然しこの事件を契機とし、地理學の本質を繞るるあらゆる研究が進められた。特に飯塚浩二氏の研究と、松井勇氏の努力は忘れられてはならぬ。前者は、その佛蘭西留學を前にして發刊された「社會地理學」の中に於ける學說史の回顧によつて一躍その名聲を馳せ、歸朝後専らこの方面に研究精進され、地理學評論誌上を飾つた「地理學史の諸問題」は好評を拍した。氏の研究の大部分は佛蘭西地理學派に集中されてゐた。もとより獨逸浪漫時代よりの詳細なる研究も、社會地理學理解の前提として研究されたものであらう。後者の努力は實に米國、英國、獨逸等の各國を台み、その紹介も亦極めて多岐に亘つてをり、氏によつて世界地理學の動向が知られたのであつた。兎に角これ等多くの眞摯な研究の結果、地理學は地誌であると言ふ見解に到達したのであつた。

- | | | | | |
|---------|---------------------------|-------|--------|---------------------|
| ① 石田龍次郎 | 地理學の法則性 | 地理教育 | 十七ノ四、五 | 昭和八年 |
| ② 今村學郎 | 石田龍次郎氏の讀後感 | " | 十七ノ六 | " |
| ③ 内田寛一 | " | " | " | " |
| ④ 岡田武松 | 石田氏の所論に就いて | " | " | " |
| ⑤ 綿貫勇彦 | ヘットナーの地理學方法論及び地表區分 | 地理學評論 | 五ノ十 | |
| ⑥ " | 地理學に於ける文化の意味 | " | 六ノ四 | |
| ⑦ " | 人文地理學の特性 | " | 六ノ七 | |
| ⑧ 今村學郎 | 人文地理學に於ける法則の存在とその時間的變化の法則 | 二、三其他 | | 昭和九年四月 |
| ⑨ " | 本邦の所謂地理方法論 | | | 日本地理學會總會發表
昭和十三年 |

一、近世地理學の發達と其の崩壞

(其他氏の本質論に對する論文はあらゆる方面に載せられてゐた)

- ⑩ 小牧實繁 マルトンヌの地誌的方法論 地理教育十八ノ五
- ⑪ " ヘットナー、地理學に於ける全體性の概念 地理教育二十ノ六
- ⑫ 別技篤彦 地誌敘述の方法についての一考察 " 十八ノ二、三
- ⑬ 松井武敏 地理學方法論、クラフトのそれに就いて 地理學論叢第三輯
- ⑭ 寺田貞次 地理學管見 地理教育十九ノ一
- ⑮ 柴三久男 近世地理學鳥瞰 歴史研究三ノ五
- ⑯ 田中啓爾 地理學論學集 古今書院 昭和八年
- ⑰ 田中啓爾 最近地理學の進歩 初等教育 昭和八年四月號
- ⑱ 同 天王寺師範學校講習會筆記抜粹(橋本與市氏稿中より)
- ⑲ 佐藤 弘著 經濟地理學總論 一一二頁 昭和八年
- ⑳ 渡邊 光 景觀發達と景觀分析 地理教育 十七ノ四五六
- ㉑ 飯塚浩二 地理學史の諸問題 地理學評論 十一ノ十
- ㉒ 飯塚浩二 フラッシュ著 人文地理學原理 岩波書店 昭和十五年
- ㉓ " フニエール著 大地と人類の進化 " 昭和十六年
- ㉔ 松井勇譯 獨逸の地理學に於ける地誌學の體系 地理學評論八ノ一
- ㉕ " Pive, E. 「比較」地理學の概念並にその近代地理學に於ける使用に關する研究 地理學評論九ノ三
- ㉖ " J. G. Herdel, Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit ①一部を讀みて、地理學論十四ノ八
- 松井 勇譯 P. R. Crowe, On Progress in Geography. Scott. Geogr. Magazine. 54(1, 938) No. 1. 1-19 地理學評論十四ノ十

合衆國に於ける地誌學の理論並に技術の大戦後に於ける展開(G. Peifer) 地理學評論十四ノ十一

" エ・マルクス 地理學的因果關係 地理學評論十四ノ十二

" ライリー 現代の地理學的方法に關する二、三の批判 " 十五ノ一

其他數多し。

③地誌への歸結とそれに対する學說の混亂

迂餘曲折を経た近代地理學の終點は地誌に集中した。特殊地理として系統的地理の片隅に追ひやられてゐた地誌は、今こそ倨然として地理學の中心に位置し、あらゆる系統地理をその家族とする主人公に變貌してゐた。それは獨り我國に於ける傾向であるばかりではなくて、殆んど世界を擧げての共通的な歸結であつた。ラツチェルの環境論一色に塗りつぶされてゐた亞米利加地理學界に於てさへ、パローの地理學會總裁就任以來地誌的研究は支配的な空氣に成長した。フェンネマン、サワー等の地理學者は起ちて地域を論じ、地域こそ地理學の本質的領域なることを喝破した。地誌の本山とも言ふべきフランスに於ては、ブラッシュの後繼者達によつて、極めて實證的な地域の論文が送られてゐた。

元來地誌の生ひ立ちの歴史は東西共に極めて古く、特に東洋に於ては地誌は地理の全部であつた。既述の如く我國最初の地理書として記録さるべき「風土記」も亦地誌の一種である。徳川時代を風靡したものは藩封地誌であり、明治以後學問の泰西化が叫ばれ、その非科學性は遠慮なく攻撃せられたにも拘はらず、地誌類は遂にその姿を失ふことはなかつたのである。然しこの期に於ける地誌への集中的傾向は、この本有の地誌の復活ではなくて、フランス學派の地誌觀と、獨逸の地域論とを母體とする「ランドシャフト」への集中である。

地誌の中心的對象として生長した「ランドシャフト」は、その初期に於て、地形學に於ける地表形狀に名付けし如くである。分類的に見た地形の特色が彼等の注目を惹き、以て地形分類の基礎とせし如くである。やがて植物形態學の發達と共に、植物景觀として利用せられ、更に人文地理學の發達と共に、風景形態として地理學に移入せられ、ヘットナー的轉回の生長と共に地理學の中核に据えらるゝに至つたのである。然し「ランドシャフト」發生の過程は以上の如くであるにしても、そのヘットナー的轉回の眞意は「個別化」の原理に立ち、「物の充填」せる地表空間を場所的に相異なるものとして眺めることにその出發がなければならぬ。即ち「ランドシャフト」の對象化は二度と繰り返して見出すことが出来ないと言ふ「一索性」が豫め假説として定立されてゐる筈である。その一索性を更に一步理想化すれば、一つの纏りをもつ調和的な全體として、その有形的固體化が施される。飯本教授によつて紹介された「地表面の諸景域内の調和」「物的に充たされてゐる限界ある地的空間」といふ所謂氏の「景觀」は、かゝる意味に於ける全體的な地域である。實に彼は渡邊氏の指摘されし如く「あらゆる種類の文化があらゆる發達の段階を通じて位置を含む土地自然に依存する」といふ土地への依存性と、「同一の土地自然は地球上二度と繰り返して見出し得ない」といふ場所的差違の事實とに、その假説の論理的根拠を見出だし、この土地と文化現象との不分離性をその場所の一索性に導入し、その総合的纏裝によつて有機的固體化を完了する。此處に於てこそ地理が他の獨立科學と同様に特定の對象を與へられ、又その對象の個性的研究こそは、一回的な出來事をその個別性に於て認識せんとする歴史學的方法を採用することが可能となる。従つて彼がカント及びリッケルト等の科學分類の形式に従ひ地理學を「空間に於ける配置の學」とし、歴史と共に個性科學でありながら、空間的な差異は時間的な歴史

によつて解決し得ないといふ理由から、第三のカテゴリーに編入したのであつた。勿論かゝる思潮は夫々の承けとりに方に従つて各國に運ばれ、斬新なる地理學的方法論として移植されて行つた。

然し地誌への熱狂的な集中が世界的に普遍化せるにも拘はらず、その學問的な見解に就ての意見は必ずしも一致してはゐなかつた。その混亂の主要方向を大別すれば、一つは景觀即ちランドシャフトの空間的な内容規定に關してであり、他は時間的な發展關係についてである。前者は地域の含む全内容を包括するか、又はその中の特定現象を抽出するかであり、より根柢的には有機的な立場に立つか、機械的な立場に立つかである。内容物全部を包括するためには有機體の原理が採用せられねばならず、そのためにはロマンチズムへの轉換が餘儀なくされる。機械的統一に於て之を綜合せんとすれば「寄せ集め」以上のものではなくてその有機性は没却せられる。又その中の特定のもののみを抽出せんとすれば、ハツツホーンの言ふ如く「目に見る觀察が地理の唯一の技術である」と言ふ根據から、直接感覺に映するもののみを抽出することとなる。そのために地理學の重要な一部を成す政治現象は除外される。且つそれは感覺的認識の強調から心理學的となり、綜合性の地盤に立つ地理學の期待に添はぬ結果となる。兎に角この兩者は景觀の分布論として保守するか、有機科學として新らしく構成するかの對立であり、未だ機械的自然觀より十分抜け切つてゐない地理學の社會に於ける當然な新舊思想の對立である。

時の問題即ち地域の發展の段階については、その史的回顧は強調されたにも拘はらず、新しき「不連続の連続」的な時間觀に立つ人達と、單なる「連続」な「早取り寫眞の連続」と見る時間觀とが對立し、共に一致するに至らなかつた。

この根柢的な立場の問題を基礎として、區分の問題、敘述の問題、或は小にしてはその機械的自然觀に基礎を置く自然景觀、文化景觀、又はその統一觀等多くの未解決な問題が錯綜し、混亂に混亂を重ねて行つた。然しこれ等の對立の根據には、その論理的精緻な組織を唯一の武器とする保守的な自然主義派と、その方法論に於て素朴ではあるが、時代の要求の前に自己を完成せんとする理想主義との對立があるのである。

然しかゝる個別化の原理の導入を筆頭に「人間性」の主張は横溢し、地理學も亦自然科学の奴婢として満足した時代を遠き古典時代に追放し、人間中心時代は成育されて來た。實に最近世の地理學はラッテルの批判に始まる人間主義の建設である。チー・ベイエフェルの「地理學は文化を人間の仕事によつて地域の上に押された刻印として論すべきだ」とか、クローウエの「地理的組織は人間の運動の結果であり」「何れも人間の意志と自然との複合體である」等といふ「人間尊重」の精神こそ現代地理學建設の中心思想である。

元來人間の自然科学への捕虜時代、即ち啓蒙時代は餘りにもなが過ぎた。近年澎湃として起つたヒューマニズム、ロマンチズムの擡頭は正にその反動であり、歴史的必然の歸結である。それは單に地理學の世界に於てのみ演ぜられた「人間解放劇」ではなくて、寧ろ自然科学の中に強力に繋ぎとめられてゐた文化科學、哲學の世界に於ける新運動の餘波であるに過ぎぬ。その端緒はあらゆる文化現象の間に見られたが、組織的には新カント學派に始まつた。その中の西南獨逸學派の歴史科學の建設はあらゆる「文化科學」一族の解放であり、建設であつた。内容的親近關係にある地理學は「地誌」として變貌し出した。古き傳統よりの解放は同時に新しき創造精神への拘束である。「一般性」の探究を以てその本質的使命とした系統的地理學は、「個別性」の認識を以て立つ地誌へ繫縛された。此

處に地誌はながきその通竄生活を捨て、地理學の中心的位置に安座した。然し新しきものは常に新しき世界觀に立つ。それは機械的自然觀とは凡そ對蹠的な有機的自然觀である。即ち對象を「生物」視し、その生きたまゝの姿を認識せんとする態度をもつ。従つてそれは空間的にはバラ／＼の部分の寄せ集めとしてではなくて、一つの不易の中心があり、それが全ての部分の隅々までも制約してをり、逆にすべての部分を中心に向つて歸依朝宗する如き有機體でなければならぬ。即ち地域が擬似有機體乃至は「空間有機體」として對象化せらるゝ所以は此處に存する。とりもなほさずそれは近代地理學生育の地盤としてのロマンチズムの復活である。元來創造は常に何等かの形でその基礎に古典の復活を前提とする如くである。此處にも文化現象に於ける傳統の生きた力がある。然しそれはたゞ單なる復活であつてはならぬ。もし單なる復活のみに止まるとすれば、正しく歴史は繰り返すのみであつて、其處には何等の進歩も認められぬ。歴史は繰り返しつゝ進化する。その爲めには常に何等かの新しきものが必要であり、この兩者の止揚統一こそ新時代の指導原理である。現代に於ける新しきもの、それは何であらうか、それこそ時間觀に對する革命的な「交互作用」である。單なる時の連続として考へられた時間は、一面過去によつて必然的に縛られながら、他面未來の希望と要求とによつて「動」き得る「不連続の連続」として把へられる。機械的に考慮せられたる因果律は因が果を決定するのみであり、果が因を決定することはあり得ない。従つて時は連續的な直線であり、「時の分子」の連続である。然し新しき立場の「時」は「一方は自己の結果である所の他方によつて決定され」、過去と未來の両面より規定される交互作用である。それはも早や單なる因果では現はし得ない。即ち過去と未來とを含む全體が、自分で自分を決定するのである。「過去を背負ひ、未來を孕む」もの、一面動けない様

に縛られながら、人間の主體的自發性を中心として未來の要求と目的とによつて動き得るものである。それはも早や「出來事の集積」や「早取寫眞の連續」としての發展ではない。この時間觀の新鮮な革命と、ロマンチックな古典的有機觀との止揚統一こそ現代の指導原理である。

かゝる立場の轉回は當然學問的變貌を伴はずには置かない。對象觀の轉換はその第一段階であり、方法論の轉回はその第二段階である。既述の如く系統的地理より地誌への動きはその第一段階に當り、因果的な「分析」に代るべき交互的な「綜合」への新しき動きはその第二段階に當る。即ち地域のもつ個々の自然現象は、その全體性への生きた理解への全體一分としてのみ價値があり、部分自身として孤立的な獨立した意味を持たないのである。今や世界の地理學界はこの第二段階の建設時代であり、すべての意味に於て現代地理學の創業時代である。現代地理學建設の課題は正に此處に存する。

然し新しきものゝ伸び行く領域は概ね舊秩序の世界の上に繰り擴げられる。古きものも未だ決して死滅してゐるのではない。衰滅し行くものと、新しく興るもの、兩者は共に時代的に逆のカーヴを描きつゝ重なり合ひ、逆にその交點に於て主客を顛倒する。現代は正にかゝる現代建設への轉換期である。従つて或意味に於て新舊兩立場の衝突時代とも言へやう。オプストはこの間の事情を巧みに表現する。今彼の論旨の概要を抄録して、所謂轉換期の姿を把束してみやう。

現在地誌の記述に二種の方向がある。一つは地誌はたゞ單に記述的であるのみならず、因果關係を明瞭にし、且つ遺漏なく説明すべきであると主張し、他は地誌は一つの地理的空間有機體をその生活全體性に於て把握し、表現し、且つ如何なるものがこの空間有機體の本質性であるべきかを示すべきであると主張する。老人は前者に力を注ぎ、地形、氣候、植物、動物、居住、經濟、交通、政治等の傳統的形式の擁護者である。彼等の考へに従へば之によつて因果の關係が最もよく表現されると稱する。青年はこの圖式に異議を唱へる。彼等はその價値を疑つてゐる。それは因果性の理論が強調される結果、他の一つの重要な契機である全體性の原理が失はれる。地理的空間有機體の生活的全體の認識にとつては、も早やかゝる圖式は陳腐な古典的殘滓なのである。それは單なる練習問題に値すべきものであつて、氣の抜けた力のないものである。

この兩精神の相違は時代精神の相違である。十九世紀的因果性への熱中をもつ老人達と、二十世紀的全體性への憧憬の中に生息する青年達との立場上の衝突である。老人は因果性に頼り過ぎ、青年は目標の明確なる指示のみに急でありすぎる。もつともこの青年達の素朴なる方法論は偉大なる進歩を藏するものではあるが餘りても素朴で、老人達を満足せしめ得ない。と。

寔に穿ち得た觀察であり、轉換期を巧妙に表現した一文である。彼の結論は兩者は共に一面の理由をもつもそれだけでは完全ではない。速かにこの兩者を含み去る方法論を樹立せねばならぬと述べてゐる。正しく現代はかゝる根本的精神に立ち、その方法論を完成すべき時代である。現代地理學建設の課題は實に此處にその出發點がある。

かゝる轉換期の混亂時代に於ける我が地理學界も全く暗中摸索の時代である。既述の如くその指導者層に於ては對象に對する轉換と共に第一段階の基礎的變貌に成功し、その修正工作を完了したのであつた。その中には法則的なものと、説明的なものとのニュアンスは見られるも、根柢的な立場に於ては機械的自然觀が固執され、その必

然るな結果は方法論的大轉換となつて具體化しなかつた。其處には切角築き上げた過去の方法論に對する未練もあり、又進んで新しきに就くべく「新しきもの」が餘りにも素朴であり過ぎた。又未だ其處には時代的に見て現實肯定の根強き近世精神が残存し、既成の世界に縋りつかむとする未練も濃厚であつた。然もそれは一つの時代を築き上げて來た人達の常であり、その時代的に見た善悪は別として、たゞそれだけで責めらるべきではない。より根柢的には「現實否定」を契機とする所謂現代精神の基本的な時代性格への發育を待たねばならぬ。

然し兎に角、明治中期以後熱望された啓蒙的な近代の建設、即ち機械的自然觀に立つ地理學の泰西化は、世界大戰以後その黄金時代に達し、基本的な性格とまで發育したのであつたが、この時代以後次第にその崩壞過程に入つたことは事實である。

- ① ジー・バイフェル 合衆國に於ける地誌學の理論並に技術の大戦後に於ける傾向 地理學評論十四ノ十一
- ② 松井 勇 譯 景觀地理學 一頁 岩波地理學 岩波書店
- ③ 辻村太郎著 政治地理學 十二頁 改造社 昭和四年
- ④ 飯本信之著 景觀發達と景觀分析 地理教育十七ノ四、五、六
- ⑤ 波邊 光 景觀發達と景觀分析 地理教育十七ノ四、五、六
- ⑥ リチャード・ハッツホーン 地理學の性格 地理學評論
- ⑦ 松井 勇 抄 譯 P. R. Crowe: On progress in Geography. Scott. Geogr. Mag. 51(1, 938) No. 1. 1—19(松井譯「地評」)
- ⑧ 田邊 元著 歷史的現實 頁 岩波書店 昭和 年
- ⑨ オアスト著 地誌と一般地理學、地誌の方法 地理教育十一ノ二
- ⑩ 小牧實繁譯

(4) 地理研究家の簇出とその地方化

その昔政治家の必須の學として重要視せられた地理學も、明治以後の所謂歐米式教育制度の中に、必ずしもそのよき地位を當てがはれたものではなかつた。既述の如く初・中等學校の中にはその科目は見出だされたが、専門程度以上の高等教育機關の中に採用されるべく餘りにも「近代化」してゐなかつた。唯一の存在として注目さるべき高等師範の地理學の講義も、高々博物乃至は歴史の寄生的存在程度であり、大學に於ては正しく地質學、歴史學者等の餘技でしかなかつたのである。然しかゝる状態も明治中期以後の廣島高師、神戸高商等の専門學校の増設、及び京都帝國大學に於ける地理學教室の創設により、次第にその「やどかり」的存在を脱して獨立し、又山崎、小川、石橋等の諸先達の近代的建設によつて漸くその専門的外形を整へるに至る。然し地理學の劃期的な發達を約束したのは歐洲大戰以後のことであり、高商、高校の増設、東大、文理大地理學教室の創設等はその第一の理由であり、文檢出身の熱心な學徒の開拓、及び大正末期以來立正、日本、駒澤、法政、立命館等各私立大學に於ける地理科の開設、各府縣師範學校の増科制度の設置等何れも地理學專攻學徒を簇出せしめし原因である。今や東西二大學を始めとし、東京商大、神戸商大にも、又は東北、九州の大學に於ても地理學は開講せられ、高校、高商、特に東京、廣島、奈良の男女高師に於ける地理學講義によつて、數多くの専門又は半専門の學徒を養成することとなり、その近代的専門化の將來を疑はれてゐた地理學も漸く時代の必須學問として生育するに至つた。

かゝる學徒の卒業と共に地方に職を求めて分散する傾向と、地理學の地誌科學への變貌とは共に地方學徒の進出となり、この時代を特色づける一傾向となつた。而も研究の實證的立場の昂揚性から、常にそのフィールドの調査

に便宜性をもつ地方學徒の進出は年と共に騰められた。これ等の學徒の中には熱心な研究に任ずる傍ら、堂々と中央に進出し、所謂「専門家」と肩を並べて輿論を指導する人達さへ現はれた。一方から見ればそれは大學の没落であるが、又他方から見れば大學の生長による地理學それ自體の水準の向上である。この傾向は昭和初年我が教育界を風靡せし「教育の郷土化」の思潮と共に昂揚化され、各縣殆んど何等かの形に於て「地理學會」乃至は「地理研究會」をもち、教育的技術の研究と共に、地誌、景觀乃至は地形學の研究に精進した。勿論これ等地方學徒の研究は中央乃至は地方の指導者層の指導の下に行はれ、その根本的な潮流に於ては既述の諸大家の反影と看做すべきである。従つて發生的に見てこれ等指導層の發育は東京高師、京大及東大の地理學教室を淵藪とする三派を中心として分裂せるものと考へ得る。

東大地理學教室は山崎博士亡き後辻村助教によつて主宰され、多田助教、佐藤弘講師、松井勇講師、故東木龍七氏、村田貞藏氏(現在東京高師)、淡路正三氏、木内信藏氏を中心とし、これを圍繞して陸士の秋岡武次郎氏、十一中校長の淺井治平氏、新井浩氏、今は文部省にある渡邊光氏、陸士の井上修次氏、經理の岩田孝三氏、經濟科出身の飯塚浩二氏、氣象臺の岡田武松博士、藤原咲平博士、其他上田信三氏、小川徹氏、岡山俊雄氏、鹿野忠雄氏、草光繁氏、西水孜郎氏、竹内常行氏、福井英一郎氏、保柳睦美氏、文部省の松尾俊郎氏、故山口貞夫氏、東大地理最初の理學博士を勝ち得られ、湖沼學の權威として時めく吉村信吉氏、ヘットナー學派の先陣に活躍されし故綿貫勇彦氏等が主であらう。東京高師の後身とも言ふべき文理大地理學教室は田中教授を中心とし、内田寛一助教、今村學郎助教(今は退職)、高師の花井重次、武見芳二、山本幸雄、佐藤保太郎、山口俊作等の教授、教諭、訓導諸氏、青野

壽郎氏、三野與吉氏、榊田一二氏等の中心陣營を圍繞して青師の井上春雄氏、浦和の磯崎俊氏、十高女の岩崎健吉氏、大泉師範の幸田清喜氏、豊島師範の矢島仁吉氏、千葉女師(今は文部省)の尾崎虎四郎氏等の一團である。京都學派は小川、石橋兩博士の學統を嗣ぐ小牧實繁博士を中心として老舗の本山をなし、廣島高師の小野鐵二氏、室賀信夫氏、野間三郎氏等を講師とし、和田俊二氏、三上正利氏、淺井得一氏、川上喜代四氏、柴田孝夫氏等を以て圍む中心陣營と、更に新進の大坂商大の別技篤彦氏、和歌山高商の松井武敏氏、山口高商の米倉二郎氏、興南鍊成院の川上健三氏、高津中の島之夫氏等によつて強化され、更にその外廓には古參株であり、既に地方學徒の中心的指導に當られつゝある岩根保重氏、菊田太郎、小寺廣吉氏、小林重幸氏、田中秀作氏、瀧本貞一氏、寺田貞次氏等をもつ大學派である。

尙これ等三大陣營の外に東京商大の地理學教室には佐藤教授を中心として石田龍次郎氏、國松久彌氏があり、東京女高師には飯本教授を中心とし、富士徳次郎氏、奈良女高師には西田教授、帷子教授あり、特に西田教授を中心とする「西田會」は多數の會員を有し、文檢に、研究に多くの業績を残してゐる。廣島高師には中佐教授、長谷川與三治氏あり、東北帝大には田中館秀三氏、九州帝大には寺田貞次氏が出張教授をなし、東北一圓に於ける田中館氏の業績も亦偉大である。又地方高校、高商等の存在は夫々地方の一中心である。就中三高の藤田元春氏、四高(後の靜高)の望月歡厚氏、新高の市川渡氏、富高の石井逸太郎氏、富山女師より四高に轉ぜられた宮崎健三氏等の活動は忘れられてはならぬ。

かゝる所謂純粹な教授乃至はその一群のエキスパート的存在を別にして、中等乃至は初等の教育界に身を置きな

から研究に、指導にと、發達史を飾るべき人達は數多い。今記憶のみを辿つて見ても大正頃より活動された小林房太郎氏、石川成章氏、西龜正夫氏、小田内通敏氏等の外に、太陽黒點と取組み、その隻眼を失ふも止めず、且つ信州の地理學的研究にその一生をかけられ、數多くの論文と、優秀なる出弟を持たれ、死の床に臨んでも地理學を行ぜられた故三澤勝衛氏、田中啓爾教授と共に地方研究の先驅者として立ち、貴重なる論文と、多くの優秀なる出弟とを養ひ、大阪地理學會の生みの親であられる故山極二郎氏、東京高師の生んだ鬼才と唄はれ、田中教授の囑望を一身に集めてをられたるにも拘はらず、若く、寂しく散つて行つた川口丈夫氏等は、今は亡き學說史を飾る巨人達である。その他北より思ひつくまゝに拾へば「樺太地誌」の大野東雲氏、北海道のあらゆる研究に優秀なるレポートを送らるゝ渡邊操氏、その昔長崎縣の研究に半生をかけた北海道の森壽美衛氏、懸賞論文に札つきの青森の今井六哉氏、山形縣の研究に没頭、遂に大著「山形縣地誌」を完成、又多くの文檢合格者を送られ自らも高檢に合格された長井政太郎氏、論文に、著述に、疲れを忘れた岩手の山口彌一郎氏、裏日本の研究と、本邦最初の高等教員の合格者の一人である福島安田初雄氏、茨城に多年の山口孝義氏、「埼玉縣地誌」の前田虎一郎氏、近代地理學の大衆化を一手に引受け、地形學に、地誌に數多くの出版物を送られた神奈川の香川幹一氏、今は校長としての激務にありながら尙地理學の現役に活躍され、多くの論文と著書に埋れ、今尙日本の指導的一勢力であられる静岡の佐々木清次氏、今は東京に去られた濃尾の鏡味完二氏、富山の原田清氏、三重縣の報告にながき辻井浩太郎氏、奈良の堀井甚一郎氏、地味な研究に山極流の學風を残す今は亡き中島敏行氏、現在の位野木壽一氏、今は司政官に去られた兵庫の秋山恒士氏、「兵庫縣地誌」の上月順治氏、香川氏と共に地理學大衆化の陣頭に立ち、特に概

觀日本地誌及新日本地誌の編纂に山崎博士以來の大成功を收められたる山口の山本熊太郎氏、業半ばにして逝かれた「徳島縣地誌」の葭本重雄氏、愛媛の村上節太郎氏、農業地理に堅實な業績を送られつゝある福岡の上野福男氏、六分にながく、「大分縣地誌」を残して鹿兒島に去られし鈴木公氏、今は既に校長として教育に精進するも、その昔夫々第一線に活躍されし福岡の金尾宗平氏、熊本の下間忠夫氏、長崎の河野正直氏等は何れもその名を知られた人達である。

これ等の熱心な研究者等によつて送られた論文及び著書は數多く、中には指導論文として學界に重きをなせるものもある。又中には單なる實證的研究の域を脱して本質論に關する論争さへ繰り擴げられてゐる。巨頭三澤勝衛氏は病中にありながら、「地理學の本質特にその對象についての考察」の一文を送り、地理學は風土性を研究する學なりと規定し、地理學に従事する學者の對象に對する根本的思惟の不足を擧げたのであつた。偶々それは昭和十一年雜誌「地理學」が昭和八年以後の渾屯たる學界の事情に應ふべく、中央地方の權威層を網羅して刊行せる「地理學批判號」であつたのである。氏の論鋒はバンゼに向けられ、且つ當代のヘットナー的方法論の第一人者綿貫勇彦氏に向つて放たれた。地域性の對象とする風土が明確を缺き、餘りにもその立場が人間的であり、「自然は人生に關係ありと眺められたる時に地理學の對象たり得る」とか、「文化の地域性は自然と違つて、土地に本源的に與へられたるものではなくて、人間生活の創造せしものである。」等の文句に反對し、それは萬有科學であり、地理學發祥時代への後退であると言ふのである。自然科学的方法論の上に自己建設を續けられた同氏として寔に當然な人間主義へのプロテストであり、病軀を推してその牙城を守らんとするその態度は範とすべきであつた。又同様に元

老的位置にある西龜正夫氏と、香川幹一氏、川口文雄氏とが参加しての「地理區」に關する論争も當代を飾る一挿話であつた。

- ① 三澤勝衛 地理學の本質特にその對象についての考察 地理學四ノ四 昭和十一年
- ② 西龜正夫 地理教育と地理區 地理學五ノ三 昭和十二年
- ③ 香川幹一 西龜正夫氏の地理區について " 五ノ四

二、現代地理學の建設

(一) 現代地理學建設への動き

(1) 一般的な動き

我々の地理學史も遂にその最後の頁即ち現代に到達した。少しでも學史の研究に經驗をもち、その苦勞を知れる人達は、この混沌たる轉換期の眞只中にいと危げな現代史編纂の小舟を進めるの愚を笑ふであらう。事實それは容易ならざる冒險である。餘程の自信があつても、始めからその轉覆は覺悟しなければならぬ。實際如何に優れた研究家と雖も、その眞相を正しく記録することは容易なことではない。況んや驚鈍の筆者如き者の能く企圖し得ざる所である。然し本書は寧ろこの現代建設に於てこそその本質的使命があり、始めからその轉覆は覺悟の前に進められてゐる。もし本書がたゞ單なる事實の忠實なる記録を以て満足せんとするならば、凡らくこの筆をこの邊で措くべきである。然し本書はこの未知世界の探究と、その行くべき道を模索する所にこそその眞使命があり、まづこの種の最初の捨石としてこそその生れ出づる意義があるのである。多くの批判と障礙の前に立ちながら莞爾として突進し行く本書の意氣は正にこゝにある。

今や世を擧げて所謂「いま」の文化に對する深刻なる否定を強ひられつゝある。そして現下の國を暗しての大戦争は意識すると否とに拘らず、燃ゆる情熱によつて「いま」の文化を大膽に清算し、變貌し行く現實の中

から直觀的に把握し、不斷に新しき生長を遂げつゝある。世は正に世界の曙であり、あらゆる「いま」の花が散りはてゝ既に新しき時代の芽が發芽しつゝある時である。勿論それは本書の如くに素朴なるものである。然しそれは未開なるもの、低級なるものとしてではなくて、新しき文化の發芽であり、輝かしき未來を擔ふものである。

元來明治維新以來の我が國の表面的國策は只管歐米化することにあつた。かくすることによつてのみ鎖國以來二百年の文化の停滯を急速に補ふことが出來たからである。従つて維新以來の指導層をなす學者の最も重要な仕事は歐米文化を紹介することであり、翻譯することであつた。直接彼の地の息吹に接し、これを見聞することの出來る「留學」はこの意味に於て最も尊重された。新歸朝者達によつて齎らされる學説は常に驚異の眼を以て迎へられ、又その新知識は大なり小なり我が文化の向上に裨益したのであつた。文化水準が異なり、而も彼我の文化を調整せねばならぬ時、まづ基準化せんとすることは寔に止むを得ぬことであり、又この國策線を樞軸として展開した當時の我國の動きも亦當然の成り行きである。然しすべてをあげての努力の結果は僅かに半世紀にして、早くも彼等に學ぶべきものは極めて少くなつてゐた。「あちらでは」と言ふ所謂新歸朝者達につきものは、自慢話も、次第に耳につき、段々その權威を失墜し始めて來た。留學は行詰まれる世の中の單なる箔付け、就職乃至は立身の一つの條件程度に下落して來た。日本は既に歐米文化を完全に吸収し、彼等と共に新しきもの、次に來るべきもの、建設、創造に參割し得る程生長してゐた。正しく日本は單なる吸收の時代を過ぎて、自己本來の職務を反省し、そのなすべき仕事に直面した新なる段階に突入してゐた。泰西化、歐米文化のかけ聲は既に昨日乃至は一昨日までの呼聲であり、遠き古典の時代に追ひやられた「山彦」でしかなかつたのである。

由來發展と言ひ、創造と言ひ、それが人間精神の創造力に基く限り、何等かの形でその基礎に古典的乃至は異國
的な即ち時間的、空間的な文化的所産の憧憬に出發することは屢々述べた如くである。近世以來あらゆる精神的遍
歴を經由した我國人の魂は、再び自己自身の出發點に立ちかへりつゝあつた。近世の創業者達によつて好んで求め
られた支那へ、西洋への空間的憧憬は、現代の建設者達には與へられてゐなかつた。其處にはたゞ自己自身の辿り
し道を深く掘り下げて進む唯一の道、即ち時間的に「ふりかへる」より外に道は殘されてゐない。従つて「日本に
還れ」とか、「日本主義」とかの現代建設の標語は決してたゞ單なる外國排斥から來る獨善主義でも、日本自身の
立場をこの際強化せんとする時局便乘主義でもなく、眞剣に國家百年の大計を樹立せんとする偉大なる創造、世紀
の黎明の前に停んだ日本の叫聲なのである。此處に「復古主義」の叫ばれる本質がある。歴史は繰り返しつゝ發展
する。たゞそれは單に繰り返すのみでもなければ、發展するのみでもない。或種の傾向性を繰り返しつゝ而も發展
してやまないのが歴史である。従つて「復古」もそのまゝ昔に還れといふのではなくて、日本當初の根源に復歸し
て、その精神をもつて新しく現代を組織せよと言ふのでなければならぬ。そのまゝそつくり昔の形式に還れと叫ぶ
ことは五十の壯年に五才の時の着物をつけさせる類である。要は衣類本來の姿に還り華美ならず、冗長ならざる衣
服を新調することが復古の本質である。すべてのものは餘りに一方的に改良して行けば行く程人の手をかけた高級
品とはなるかも知れぬが、そのもつ本來の性質と乘離し勝ちである。菅原氏の例にある如く、高級な葡萄は普通の
露地栽培では病害に犯され、その生命力が弱るので、完全な温室の中で餘程念入りに育てられる。然しそれでも容
易に育たない。これを救済する一手段として「根接」といふことをやるとのことである。それは高級葡萄の枝を野

生の葡萄の木に接木することで、さうすると不思議にもその生命力の強さを取り戻して病蟲害に對する抵抗力が強
くなり、露地栽培にも耐へるやうになると言ふ。即ち高級化せる強さを失へるもの、やがては枯衰の急坂を轉落し
行くものを一度復古せしめて生命の根源力を與へ、本來の姿にたちかへらせる營みである。今日我々の直面する營
みも亦かゝる種類の外科的手術であり、一路歐米化された文化を否定して日本的な生命力の根源に接木し、新しき
息吹を與へて再生せしめんとするのである。

かゝる急轉回への直接的なモーメントをなせるものは滿洲事變である。昭和五年のロンドン軍縮會議以後、國內
革新派の間に躍動しつゝあつた勃興日本の生命の流れは昭和六年九月十八日の滿洲事變の勃發によつて遂にその堤
を決した。躍進日本の生動に無理解であり、却つて之を再び狭少なる本土におし込めんとした國際聯盟を斷固脱退
し、次で獨立日本に屈辱的地位を強要してゐた華府條約をも破棄したのであつた。舊世界秩序の繫縛を脱し、日本
の意圖する理想を實現するためには必然的に時艱の克服、廣義國防國家の建設が要請された。現代の國防的特質は
獨り兵備の充實のみならず國民精神の昂揚を通じてあらゆる局面に亘つての充實が必要である。従つて軍備の充實
と相並んで國民生活の安定、特に農村救済、經濟革新の叫び聲高く、資本主義の否定、之と共に資本主義經濟の基
盤である自由主義の否定、延いては自由主義思想に胚胎する政黨政治の否定等あらゆる部面に亘つて庶政一新の輿
論は日と共に昂まり、その熱度を加へて來た。その改革の矛先は維新以來の歐米的なあらゆる輸入建設の上に向け
られたが、それ等の全面を通じてその根柢を流るゝものは日本本來の姿に復歸せんとする「國體明徴」の精神であ
る。正しき日本の「在り方」自身に還ることである。維新以來全く米英化せられた「おどろが下を踏みわけて」、

今一度遠つ御祖達の通りし足跡を見んとするのであり、あらゆるものを本來あるべき日本的な在り方から眺め、之を再組織せんとするのである。荒れ狂ふ全面的否定の根柢は此處に存し、國體明徴の輪廓はこゝより與へられる。國家の上層に位する先達の士、當時の所謂支配階級、既成勢力等多くの障礙を乗り越えて到達したこの運動の形も明治維新の如く「尊皇攘夷」即ち個人主義、唯物主義等の外來思想排撃、皇室中心主義、日本精神を基調とする愛國運動、國內革新運動としてよりあがつたのである。傾向性が繰り返される事實は正しく歴史の原則である。

破壊は又同時に建設である。國體明徴運動は一方に於て英米的秩序の否定であり、同時に日本的秩序の再建設でなければならぬ。申すまでもなくそれは尊皇攘夷であり、攘夷を通じて尊皇に復歸することである。尊皇即ち

上御一人の「大御稜威」に歸依し奉ることである。恰も近世一代を通じて、總ての權威を否定し、自我の奔放なる自由を主張し、自己を以て最高權威と信じて來た近世的國民の心の奥底に、再び一貫する權威を憧憬し、この權威の下に再組織せんとする本然の心が復歸したのである。圖らずも我々は此處に中世乃至は太古代の復活を發見する。その中心的權威の性質から見れば寧ろ太古代への復歸であり、この本然の姿より歐米によつて歪曲せられた現實を否定せんとする傾向は中世的である。此處に明瞭に近世の否定せられて行く姿がみられる。現實こそ最大の眞理であるとして熱情を以てこの現状をそのまま肯定せんとしてきた近世現實主義は今や再び現代人によつて否定せられ、それは全く歐米人によつて歪曲せられた姿であるとする現實否定の精神が生育するのである。此處に現代建設の特色がある。五月蠅なす外來思想の眞只中に立ち、我が遠つ御祖達の經し來し跡をふりかへり、現代人によつて發見された權威の主體は實に「大御稜威」であつた。

正しくこの一大發見こそ現代日本の一大發見であり、日本自體の再認識である。従つてあらゆるものゝ再組織はそれが現代的である限りこの一大生命力に縛がるゝことであり、接木せられることである。あらゆる學問の再組織も亦同様にこの權威の下に各々その所を得て歸依統一すべきである。此處にこそ學問の世界に於ける國體明徴があり、現代學問の特質が存する。新しき主潮は多くの困難と摩擦とを乗り越え、發展し行く時局の現實の中から急速に生長し、偉大なる力となつて普遍化して行つた。

① 菅原兵治著 素材なるもの 序文 備成社 昭和十七年

② 同 同 六頁 同 同

(2) 地理學界の澁滯と中等學校教授要目の改正

恰もかゝる強力なる渦が旋回し、朝野を擧げてその中に捲き込まれつゝあつた頃、我が地理學界はその本質論に血道をあげ、遙かにかゝる大思想生育の周邊にその身を避けて只管武陵桃源の夢をむさぼつてゐた。それには多くの原因があらう。まづ比較的遅れて近代化した地理學にとつてその科學的建設は全く目まぐるしき歐米新思潮の送迎であり、この「停車場的」地理學界の性格から新しき國體明徴の運動も亦同視せられ勝ちであつた。——又折角苦心して吸收した古きものへの捨て難き愛着と、新しきものへの未經験から來る危懼もあつたであらう。然し根本的には「現代精神」の未成熟にその原因は求められねばならぬ。新しき時代の渦が物凄き勢を以て廻轉してゐたにも拘らず、それはまだ社會の一角の新思潮としてのみうけとられ、時代の基本的性格として發育するまでに到達し

てゐなかつた。加へて比較的近代の學問の周縁に位置し、新しき時代の息吹を感じることに鈍かつた地理學にとつて餘りに縁遠き事として感ぜられてゐたのかも知れない。

然し迫り来る國際的緊迫感の中に、相變らず輸入文化に没頭し續けてゐた人達の間にも事態の容易ならざるものが感ぜられ、寧ろ獨逸地理學界の動きを通じて「國家主義」に轉回すべき必要を痛感せざるを得なくなつて來た。歐羅巴の風雲は單なる對岸の火災ではなくして、日本自身の火災であり、日本の危急存亡であつた。學界の一部には早くもこの機運に動かされ、少くとも地理學の研究を國防と結び、地理教育を愛國心に培かはねばならぬと叫ぶ人も出現するに至つた。

まづその最初の現れは昭和十年八月の「國體明徴」の聲明が發せられてからである。この方面の新進であり、權威者であつた佐藤弘毅教授は雑誌「地理學」誌上に「國家主義と地理學・エバルト・パンゼの國防科學の概念」を發表して先鞭をつけられた。元來パンゼはなからその方法論の非科學的なる故に我國の學者によつて排撃され續けた獨逸地理學徒であり、既に大正の初年頃より分析的方法に對蹠的な「綜合的地理學」を提唱してゐた。「全體主義への努力といふことこそ現代を最もよく特色づけてゐる。自由主義時代はその分裂と懷疑とを以て、遂にあらゆる價值あるものゝ分裂を齎した。かくしてそれは清算されて、國民主義の時代に代られた。しかしこの國民主義の課題は、前の時代から殘された殘片を再び全體に綜合し、形のない人間群の混亂から確固たる形をもつた國民といふ單位を取出すことにある。」と、分析に代つて綜合の尊重するべきこと、國家主義の有力化しつゝあることを述べ、當時の我國の狀態から見ても興味があり傾聴に値すると報告してをられる。然しまだそれは單なる紹介の程度で

あり専らこの方向に向はんとする獨逸學界の事情を通じて滯滞せる當時の我が學界への一警鐘に過ぎない。當時の我が學界が時局に如何に無關心であつたかは同誌のゴシップ欄の「彼岸に拾ふ」の題下に「日本にも早や戰爭の氣候學、戰爭の地形學が出てよい」といふ待望論が見られる程であり、以て當時の情態を窺ふことが出来る。然し佐藤教授は南大といふ環境からも最も鋭敏にこの時局を疑視された一人である。既に地理學三ノ九には「本邦重要資源とアウトタルキー」を掲載して、日本の資源貧弱論を展開、國民の積極的能力によつて之を克服すべきことを論じてをられる。同じく同誌四ノ二、三に再び筆を執つて「エバルト・パンゼの地理學理論」を掲載、その論末にパンゼの地理教育論を附加された。曰く「あらゆる國土、あらゆる民族は、常にドイツ的觀點から眺めらるべきである。我々ドイツ人にとつては、外國はそれ自體として、即ち單なる學究的な對象としては、何等の注意にも値しない。それはたゞ我國への關係に於てのみ重要なのである。殊にこのことは外國の民族の性質について言へるのである。一人のドイツ人がリーズとかシェフィールドとかいふやうな地名を知つてゐるかどうかといふことは、どうでもよいことだ。併し彼が英國人の國民性を正しく理解してゐるかどうかといふことは、決してどうでもよいことではない。我國從來の政治及軍事上のあらゆる失敗は、確かに我國人の民族心理的な認識不足に基いてゐる點が少くなかつた。故に新しい地理學は、綜合的であるばかりでなく、國家的でなければならぬ。」と。慥かにこのまゝの希望と要求とが當時の我が地理學界にも課せられつゝあつた。永らく人間主義地理學の第一線に立ち、而も當時の地理學の行詰りに不満を啣たれてゐた教授の心は早くもこの方面への轉向に魅せられてをられたに違ひな

50

同様に地理學界乃至は教育界の一方の指導者である佐々木清治氏は同誌四ノ七に「國家主義と地理教育」を掲げ内外共に未曾有とも言ふべきこの非常時に際し、新しき地理學、新しき地理教育が生れねばならぬ。とて從來の地理學の對象であつた「自然と人類との關係」を「地球と國民との關係」に置換へ、より國家主義的にならねばならぬと論ぜられた。共に勃興日本の行手に何か清新な地理學を創造せんとする革新的な最初の叫聲ではあつたが、何れもそれは單なる空間的憧憬より來る紹介又は燒きなほしの程度であり、眞に日本的な生命力の根源に根ざして日本地理學を建設せんとする企てはなかつた。強いて言へば維新以來の傳統的な紹介の連續であり、外國的なものにその權威を認めんとする態度である。如何にそれが國家的なものであつたとしても、眞に「尊皇攘夷」の根源に立脚するものではなかつた。然し其處にも亦時代の未成熟があり、かゝる叫聲すら尙當時の學界の一隅から白眼視され勝ちであつたことを思へば寔に致し方なきことである。

國體明徴の聲明と共に着手した中等學校教授要目改正の所謂「六科目」の一つとして地理科が改正せられたのは戒嚴令下に劇的成立を遂げた廣田内閣誕生後間もない昭和十二年三月である。地理科がかゝる意義ある改革の中に編入せしめられたことは寔に限りなき光榮であり、著しく歪曲せられた近世地理學はこれによつてその相貌を一變する筈であつた。然し餘りにも急轉回する時局の動きは、一時的の改正の如きを既にその完成の當初より陳腐なものとして古典の世界に追放する程の早さであつた。

「地理ニ於テハ自然及人類生活ノ情態ヲ理會セシメ兩者ノ相互關係ヲ明ニシ特ニ人類ガ自然ヲ利用開發シテ世界各地ノ文化ヲ形成セル所以ヲ知ラシメテ、我國民性、國民生活、國勢發展ノ因由ヲ明瞭ニシ、諸外國トノ比較ニ

依リテ我國ノ特性及世界ニ於ケル我國ノ地位ヲ正シク把握セシメ以テ國民精神ヲ涵養シ國家ノ興隆ト民族ノ發展ニ資スルヲ要ス」

は改正中學校教授要目の目的觀である。要目はまづ地理の對象が自然及び人類生活と相互關係にあること、その解明に當つては人間主義的に人間の努力を重視すべきこと、日本地理特に我が國民性、國民生活、國勢發展等の解明を中心として、外國地理との對比により、我國の特性、地位を知らしめ、國民精神を涵養し、國勢發展に培はんとするにあり、形の上からは言はんと欲するすべてのことを並べられてはいるが今一步國體明徴のための改革としては寔に物足りなく感ずる。時代は既に地理學の自律性の上に國體明徴の精神を附加せんとするものではなくて、寧ろ逆に國體明徴の下に地理學を動員せんとするのである。「大御稜威」を中心として國民一體となつて一つの「くにいへ」をつくりあげてゐる、この日本の國民性、國民生活、國家發展等の優秀性を外國との比較により徹底せしめ、益々この優秀性を發展せしめんがために地理教育を施すのであり、地理教育の眞使命は實に此處に存するのである。そのための自然と人間との相互關係であり、そのための國民の血みどろの努力でなければならぬ。恰も一讀してその主客を顛倒するが如き感を與へる要目は既に急轉回しつゝある時勢から見離されてゐる。然しこの程度の拘束ですら獨立科學としての地理學の面目に關係せしめたか、學徒の中にはこれを潔しとしない者もあつたのであらう。昭和十三年石橋博士は雑誌「地理教育」二七ノ四に「祖國地理」を掲載、頗る啓蒙に盡力され、元來地理學は皆時代の社會的要求の結果變貌し續けて來たものであり、現在ドイツに於ても祖國地理が強調せられてゐること、その巨頭オールブリヒトの主張を掲げて學徒の向ふべき方向を教へられたのであつた。

念ふに學界は本質論の大衝突時代の後を享けて未だ十分その餘波は治まらず、自然主義と人間主義とは尙圓滿なる解決を見てゐなかつた。かゝる學界の兩派に或程度の満足を與へ、而も當時の實情に即しながら國體明徴運動に動員しなければならなかつた當時の事情として又止むを得なかつたのであらう。かゝる事情からも當時の我が地理學界が如何に滯滞してゐたか知られる。然し又それは獨り我が地理學界にとゞまらず尙國內の多くの部に於ける實狀でもあつた。地理學關係方面に於ても「地理教育」の「太平洋特輯號」、「地理學」の「世界の競争地帯」等の特輯號等を發行し、時局に平行せんとする努力は見られたが、未だその本質的な轉換は見らるべくもなかつた。

①佐藤 弘 國家主義と地理學、エバルト・パンゼの國防科學の概念 地理學三ノ十

②同 エバルト・パンゼの地理學理論 同 四ノ二

③佐々木清治 國家主義と地理教育 同 四ノ七

④石橋五郎 祖國地理 地理教育二十七ノ四

(3) 國民學校案の完成

微温的であつた中等學校の糊塗的改革に比し、より根元的な、自主的日本教育の確立は「國民學校案」として現はれた。畏くも昭和十二年十二月十日、上諭を賜ひて「教育審議會官制」を發布せしめ給はせられ、新日本教育の本來「あるべき姿」が根本的に審議せられることとなつた。この事業たるや實に明治五年「學制」發布以來の大事業であり、日本教學の根本的刷新であつた。維新の指導者達があらゆる行きがかりを捨て、一路開國進取の當時の大理想に突進せるあの情熱はそのまゝ未だ嘗つて日本が一度も經驗しなかつた「新世界の建設」と言ふ一大理想に

向つて燃やさるゝに至つた。應接に遑なかりし外來文化を一應一擲し、自己自身の創造力を唯一の杖としてこの難問題の解決のために起ちあがつた。そのためにその教育は日本自身の當面せる現實的要求から生れ、そしてその要求を十分満足せしむるものでなければならぬ。

多くの會合と、幾多の論議を重ねた審議會は、一應の論議を終へて昭和十三年の暮に近き十二月八日—この日は後に記念すべき日となつた—報告せられた。その報告書には「皇國ノ道ノ修練ヲ旨トシ、其ノ内容ニ根本的刷新ヲ加フルコト、シ、教科ヲ統合シテ教育ノ徹底ヲ圖リ、國民精神ノ昂揚、知能ノ啓培並ニ體位ノ向上ニカメ、知徳身心ヲ一體トシテ國民ヲ鍊成シ、以テ内ニ國力ヲ充實シ外ニ八紘爲宇ノ聖國精神ヲ顯現スベキ次代ノ大國民ヲ育成セシムコトヲ期シタ。」とある如く、それは名實共に國民教育を一新せんとするものであつた。その要項の第四、第一に「教育ヲ全般ニ亘リテ皇國ノ道ニ歸一セシメ、其ノ修練ヲ重ンジ、各教科ノ分離ヲ避ケテ知識ノ統合ヲ圖リ其ノ具體化ニカムルコト」とあり、その根元的主張が眞向からふりかぶられてゐる。まづあらゆる教科は皇國民鍊成の一途に統合され、こゝに歸依統一することによつて始めてその位置を與へられるといふ新しき組織こそながらく渴仰されてゐた所であり、これによつて始めて皇國教學の本義が明瞭にせらるゝに至つた。すべてのものを「大御稜威」の權威の下に各々その所を得て統合することこそ新時代建設の新組織でなければならぬ。とりもなほさず國民學校案を成立せしめた根據も此處にあり、明かにそれは維新以來の教學の統一方向とその趣を異にする所である。夫々自律的、孤立的な各學科をすべて寄せ集めてその平面的統一を企圖する如き機械的な自然主義的統一を排し、一つの「皇國民の修練」といふ中心に、各學科はその独自の使命を以て結ばれるといふ有機的な新組織が採られてゐる。

それは「平等な」、等質的なものゝ集合ではなくて、「不平等でありつゝ平等」な統一であり、横の統一ではなくて一定の秩序をもつ縦の統一體系である。

かゝる新しき統一原理による必然的な結果は、すべての教科をその中心である「皇國民鍊成」の分節化することであり、同時に全ての教科は又「一定の分身化」を通じて中心に歸依統一することである。かゝる組織は上位分節より下位分節に至るまで一貫し、各教科も亦かくの如き有機的統一原理に従つて縦に再組織されねばならぬ。

國民學校案の體系の中に於ける地理科は「皇國ノ道ノ自覺」を直接その独自の使命とする「國民科」の分身として「身分化」せられ、新しき國民學校の秩序の中にその位置を占むることゝなつた。その具體的な教則は遅れて昭和十五年三月に至つて始めて示された。

「國民科地理ハ我國土國勢及諸外國ノ情勢ニツキテソノ大要ヲ會得セシメ國土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亞及世界ニ於ケル皇國ノ使命ヲ自覺セシムルコト」

これはその時示された國民科地理の目的である。これを詮じつめれば「愛國心を養ひ、東亞及世界に於ける新秩序建設の皇國の使命を自覺せしむるために、我國土國勢及諸外國の情勢の大要を會得せしむる」ことになり、他の國民科の諸學科と共に平等の使命に培かはんとするのである。國民科地理組織の中心は實に此處に存する。孤立的、自律的な所謂既成地理的立場を一擲し、國民科の使命である「皇國ノ道ノ自覺」といふ中心に向つて歸依統一する姿こそ新教則の根本的精神である。在來の地理教育がともすれば孤立的な地理學習を中心とし、その完成を通じて始めて、恰も附隨的に、愛國心の教養や、國民的自覺に寄與してゐたのとは全く對蹠的に、始めからこの中心的使

命をうけて、その命のまにまに歸依朝宗するといふ主客顛倒した立場がとられてゐるのである。百八十度の轉回といふ言葉は決して單なる言葉の綾ではなくて、眞にその組織、秩序の大轉換を意味するのである。然し、それはそのまゝ他の修身、國語、歴史等と全く同一になるといふことではない。同様な任務に従事しながら、地理は地理としての独自の性質に應じて異なつた仕事に従事するのである。明かに教則に示される如く「我國土國勢及諸外國ノ情勢ニツキテ云々」といふ教材は、國民科地理が他の學科と截然異なることを意味し、異質であることを物語るものである。「一如」といふ筈に含蓄に富む言葉が「同一」といふ意味ではなくて「一の如し」といふ字句の如くに、「同一でありつゝ異なる」又は「不平等でありつゝ平等である」といふ有機的組織こそ國民學校教科の構成原理である。恰もそれは一人の人間生活に於て、手、足、頭等の各肢體が夫々その独自の性質に應じて特定の任務に従ひながら、一人の人間活動といふ一つの中心目的に歸依朝宗してゐると全く同一である。従つて「我が國土國勢及諸外國ノ情勢」は地理科独自の異質的な仕事であり、「國土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亞及世界ニ於ケル皇國ノ使命ヲ自覺セシム」は國民科の他學科と同様な任務でなければならぬ。かくの如く不平等即ち異質的なものを通じてこそ始めて動きをもつ有機的な統合は可能であり、又共同の目的の下に活動してこそ有機的調和は保證される。

かくの如き「身分化」の構成原理は更に國民科地理自體を再組織する。もとより既成の機械的な「位置、地勢、氣候、交通、産業、都邑」といふ圖式的方法を一擲して、新しき「全體一分」の構成原理に立ちてその再整頓を圖るのである。即ち根元的な「國民科地理の目的」に立脚した「價値の別」に従つて、最高の價値を頂點として分節化し、所謂「ピラミッド型」の統一體系となるであらう。これを兒童心身の發育狀態に即應して、まづ初等科第三

學年までは種子、又は萌芽の状態に於て躰乃至は國語の中に孕まれ、四年に至つて歴史と共に郷土の生活の實際に即して郷土を觀察せしめ、これによつて或程度郷土を理會せしむると共に國史、地理學習の素地に培ひ、五年に至つて始めて國民科地理として分化する。五年に於て國土と國民生活との關係を通じて我國の優秀性を知らしめ、大理想實現への確固たる自信を持たしめると共に愛國心に培ふ。この自信と愛國心こそ未來の偉大なる理想達成への推進力である。そのために國土の優秀性が問題となるのであり、又その優秀性が信ぜられてこそ愛國心も湧き、この國土を永遠に愛護しなければならぬといふ感情も起る。正にそれは政教社に身を寄せて國本主義を高唱してゐた志賀重昂の「日本風景論」の復活であり、又太古以來この國土の「清澄觀」、「親愛感」に生きて來た我等の遠祖の「赤き心」への復歸である。日本こそ正しく「古きものを失ふことなしに」、あらゆる新しきものを消化する國である。太古以來の我等の遠祖親達の心の奥底に抱かれた感情は少しも失はれてはゐない。昭和十八年四月、この新精神を盛つた「初等科地理上」の開巻第一頁「日本の地圖」は、その形から、位置から、他との連絡から實に日本は優秀であり、尊い國であることが描かれてゐる。現代のロマンチックな時代的雰圍氣の中に生長し行く兒童達はこの文を感激に打ちふるへて讀み行くことであらう。國土地理の中心的意圖はこの「日本の地圖」であり、以下そのすべての部分はこの中心目的の下に結ばれつゝ、更にその獨自の性質に應じて夫々異質的職分に身分化されて行く筈である。かくの如き「全體より部分へ」の統一方向は又全教科書に一貫して現はれる。

初六の東亞地理はこの國土地理の後を享けて、我等の理想とする大東亞建設が可能なるためには本來大東亞が地理的に「一體」でなければならぬ。實現困難なることを夢みることは單なる夢想でしかない。この大東亞は本來一で

ある」といふ事實を知らしむることが大東亞地理の上に對する身分化であり、同時に下に對する統一の中心である。この理想に照して歐米の侵略によつて著しく歪曲せられたる現實を否定し、この慘な民族を救済し、各々その所を得しめんとする大東亞建設が雄々しく進められつゝあり、慘めな亞細亞の民族が次々に起ちあがつてこの壯舉に参加しつゝある情況よりこれ等の民族を提げて立つ雄大なる氣宇を養ふことも必然的に起る課題である。日露戰爭直後約四百年來の白人壓迫下に呻吟してきた全亞細亞の民族は蹶起して「亞細亞の解放」即ち各民族の獨立を叫んだ。それ等の運動のすべてが日本の大捷に原因し、而もその大部分は日本を中心に亞細亞の解放を叫ぶ運動であつた。その時殆んど亞細亞の全民族は始めて同族感を意識し、相率ゐてその本來の姿に歸らんとした。この雄大なる理想を卒直に表現したのは岡倉天心著「東洋の理想」の開巻第一頁「アジャは一也」の自覺である。この理想の言葉こそ今日亞細亞十億の民をして各々その所を得しめ、萬邦共榮の實をあげんとする今日の我國の理想であり、一の中心な東亞地理教授の統又そのまゝが大のである。

更に高等科第一學年に於てはかくの如き大理想を實現せんとする地位と使命とを有する我國の立場を理解せしめんがために、亞細亞以外の列國中我國と關係深き國々を選び、その國家活動の情況を知らしめんとする外からみた國土地理、東亞地理である。味方を知り又敵國を知るのは今日の我國の當面せる急務でなければならぬ。かくて高等科第二學年に於ては内外の展望を終へて、世界的眼光の下に我國勢をとき、以て東亞及び世界に於ける我國の地位と使命即ち大東亞共榮圈を確立せねばならぬといふ自覺を促がすのである。

かくして郷土の觀察、國土地理、東亞地理、世界地理、國勢地理は夫々教授進行に従ひ、各々その獨自の性質に

應じて異なりつゝ全體として平等なる「皇國ノ道ノ自覺」といふ根源的使命に歸依朝宗する分身化である。勿論かゝる各分身に於てもより下位分節に分身化し、その内容は極めて多方面に分裂し、異質化するであらう。然しその根源の道に歸依朝宗することに於ては變りがない。かゝる方法的手續を経て始めて教育の全内容は根元的な「大御稜威」に繋がれ、下各々その所を得て獨自の職分に従事することとなる。國民學校に始められた教育體系の全面的改正はやがて師範學校、中等學校、高等學校、專門學校、大學と順次に一大刷新の手がのべられ、すべてをあげて「皇國の道」に則り、上「大御稜威」に歸依統一せられて行つた。時局の急速なる進展は獨り教育の畑のみにとゞまらず、政治、文化、經濟等凡そありとあらゆる面に改革の手は擴げられ、すべての存在するものをあげて「大御稜威」に統合したのである。とりもなほさずこのことは一朝有事に際し、常に我國民が示して來た歴史の傳統であり、遠々御祖達の示せる正しき「日本の在り方」である。

かくの如き時局の緊迫の下に現代精神は急速に生長し、漸く基本的な時代の性格として支配的となつた。ながらく時局に對し無頓着を装ふて来た我が地理學界もジャーナリズムに引きずられ、雑誌「地理學」では昭和十三年事變色豊かな「持てる國、持たざる國」、「地理教育」では「支那特輯號」等を送り、其他研究論文の中にも漸く「地政學」的研究は多きを加へ、小川博士の「戰爭に反影する支那の地理的特色」、内田寛一助教授の「時局と地理教育」、國松久彌氏の「國防地理學講話」等が掲載され、昭和十四年に至れば「地理教育」の「興亞國策地理教育論」、「南洋研究號」、「地理學」の「獨逸の地理教育を語る座談會」、「東亞新秩序建設號」等が送られ、益々時局色濃厚化するに至つた。

然しそれ等の研究の多くは未だ所謂知識としての「認識」程度であり、方法論的にも依然舊態、新味に乏しく、僅かに國策迎合の形に於て接近化せるのみであつた。これを眞に一度び否定して日本的なものへ再建設する努力、即ち「大御稜威」に結ぶ地理學の再建設は小牧博士の「日本地政學宣言」の登場を待たねばならぬ。

- ① 日本文化 三十三 教育審議會資料 十四頁 國民精神文化研究所
- ② 小川琢治 戰爭に反影する支那の地理的特色 地理教育二十七ノ五
- ③ 内田寛一 時局と地理教育 同 二十七ノ六、七
- ④ 國松久彌 國防地理學講話 地理學 六ノ十一

(二) 日本地政學の建設

現代に於けるあらゆる學問の再建設は、すべて「大御稜威」の下に再組織することに始まると筆者は固く信じてゐる。現代文化の特質が、所謂「いまゝで」の文化を大膽に清算し、大御稜威の最高權威に結ばれて始めてその體系の中にその獨自の性質に應じてその地位と使命とを與へらるゝ限りに於て、現代學問の特質も亦この明確なる支配の中に於ける再組織でなければならぬ。類似は何處までも類似であり、接近は又何處までも接近である。この明確なる特色を持たねばならぬ地理學、否新日本地理學に類似のものは早くから存してをり、又かくの如き色彩に接近せるものも多い。獨逸地政學の如きはその類似せるものであり、事變以來徐々に時局色を増して來た既述の論文

の如きはその接近である。類似とは假にその形態上のことであり、接近とは氣分上のことであるとする。その當否は暫く措くとして、少くともかゝる假設の上に立ちて地政學方面に於て「新日本地政學」を建設せられたる人は小牧博士である。その理念に於て、その方法に於て、正しく博士の地政學は自主的な日本地政學の新建設であつた。久しく待望せられた學界に一脈の清新な氣分を漲ぎらしたのみでなく、現代學問の特質を十分備えたものであつた。勿論それは時代の進展と共に方法的な缺陷も擧げられてはゐる。然し存在するすべてのものは時代と共に發展するのであり、屢々述べた如く完成といふことはあり得ないのである。

今此處に博士の地政學を本書の頁に送り込む前に順序として所謂地政學の發育史を展望してみたい。

(イ) 地政學の鼻祖、ルドルフ・チエレイン

ルドルフ・チエレインに地政學の源を置くことは誰しも異存がない。彼は元治元年、瑞典のトルソーに生れた。恰も我國に於ては松平容保が守護職に復活し、長州征伐の陣營が繰り擧げられる維新寸前の「夜明け前」である。彼は成人の後、明治三十八年より四十一年まで上院の若き保守黨議員となり、四十三年よりゲテボルグ大學の國家學及び統計學の教授、四十四年より下院議員、大正五年よりその死去に至る大正八年までウプサラ大學の教授であつた。

彼は元來政治家であり、國家學者である。彼の創始にかゝる「ゲオポリティク」といふ言葉は明治三十二年四月、彼の公開講演に於て初めて使用せられたものである。その當初に於ては恰も明治三十年ラツチェルの「政治地

理學」出版の影響を受けて、政治地理學の同義語として使用せられた如くであるが、その後次第にその意味内容を變じ、彼の創造による一つの純粹經驗的國家學の一つの「必要なる分岐」に置換へられるに至つた。もしそれが言はれる如くであるとすれば凡らく彼は彼のもつ保守的性格の上に「生の哲學」の影響を受けたものであらう。彼の所謂純粹經驗的國家とは國家の「生ける生」の把握を企圖せるものであり、國家は絶えず新たな内容を創造し行く活動體として對象化せられたものである。明かにそれは自然科学的對象觀とその趣を異にする。まづ我々は素直にこの差違を認めねばならぬ。對象觀の差異は同時に方法論の相違である。その對象の生を把握するためには「生に即して生を超える方法」即ち直觀的理解等がとられ、あらゆる概念的思惟を排する非合理主義である。十九世紀後半を風靡せる啓蒙的な自然科学的方法が、その銳利なる分析、綜合の抽象化によつて「死せる生」、「凝結し固定せる生」を認識する結果に陥つたのと全く對照的である。

彼が從來の「國家とは一定の土地に據り、獨立にして恒久なる統治組織をもつ人民の團體」といふ土地、人民、主權の三要素をもつて構成せられたものとする月並な抽象論に反對し、自己内部の力によつて生々發展する創造的な有機體であるとしたのは蓋しこのためである。勿論單なる「生物」即ち「有機體としての國家觀」は決して彼に始まるのではなくて、遠くラツチェルに遡る。ラツチェルの快著「政治地理學」は國家を有機體とする假設の上に建設されてゐることは既述の如くである。然し單なる言葉の類似は同時にその内容の類似ではない。この兩者の間には明かに時代の差違を認めねばならぬ。地政學といふ言葉の創造された當初はとも角、既に「領土としての國家」が發行された時代の地政學は明かに異なる形に於て出現してゐた。即ちラツチェルは自然科学的な「機械論的

有機體觀の上に立ち、チエーレンは浪漫的な「目的論的有機體觀」の上に立つてゐる。より具體的に言へばラッチェルは死せる自然現象としての國家觀に立ち、チエーレンは「生ける」そして「意志をもつ、餘りに人間的な」國家觀に立つてゐる。前者は分析の對象として解剖臺の上に載せられた國家であり、後者は理想をもち、意志をもつ動きつゝある國家である。後者は前者へのプロテストであり、自然科学的方法があらゆる文化的領域をもその鎖の中に繋ぎとめた機械觀に對する鋭き批判である。それは理知的な唯物論乃至は唯心論の到達し得る彼岸のものを目指す一種の新ロマンチズムである。人或は單なる言葉の類似性や、或は屢々告白された謙虛なチエーレンの言葉に眩惑されて、政治地理學と地政學とを混同し勝ちである。比較的よく區別するとしても「動的」とか、「應用」か極めて些末な枝葉に走りすぎ、その本質を區別し得ないでゐる様である。それ等の多くはこの明確なる立場の差異を十分認識せぬためである。地政學はまづこの本質的な立場を十分理解せねば混亂と無理解に陥るのみである。恰もそれは所謂「いまゝで」の學問と現代の學問の差違の如くに、まづ根元的な立場の轉換がその出發でなければならぬ。青い眼鏡をかけてゐる人は如何に眼先が變つても、青く見え、赤い眼鏡の人は赤く見えるのである。

かゝる新しきロマンチックな立場に立てばこそ彼は國家を、領土として、家計として、國民として、共同體並びて統治主體として分節化してゐる。これ等は單なる國家構成の要素ではなくて、一つの國家活動にとつての肢體である。恰も一個の活動せる人間にとつての手、足等に相當する。單にそれは要素的な自律的、孤立的な部分ではなくて、常に創造進化せんとする國家の中心に向つて、夫々独自の性質に應じて異なる任務を持ちながら平等に歸依する。

然し他面發展的段階から見れば地政學は政治地理學の發展とも眺めることが出來やう。機械的自然觀の時代に於けるラッチェルの政治地理學が有機的人間主義時代に於けるチエーレンの地政學への變貌であり、時代的な更正刷新である。この點チエーレンはラッチェルの新しき意味での正しき後繼者であると言へる。師の仕法をそのまゝ繼承することも一つの出弟道であり、これを時代的に更正、乃至は發展擴充することも亦出弟として採らねばならぬ道である。前者は略々同様なる時代的環境が繼續する限りに於て正しく、後者は時代の轉換期に於て尊重さるべきことである。かゝる觀點に立てばラッチェルは今日も地政學の中に生きてゐることになる。近代の地理學者中ラッチェル程影響力の大であつた學者はまづ少い。佛蘭西學派に影響しては地誌となり、瑞典學派に繼承せられては地政學となる。前者は十九世紀の新發見である歴史的概念の導入により、ラッチェルの部分を徹底せしめたものであり、後者は「生の哲學」的方法の導入により「全體」を止揚したものであらう。かく觀する所にこそ歴史は「生き生きした姿」をまさ／＼と認識することが出来る。

彼の「ライヒとしての國家」は彼の晩年に近き大正六年に發刊された。本書はまづ國家活動の「肉體」とも見らるべき「領土」の種々の類型をのべ、國家はこの領土を離れて存在し得ぬこと、この點國家は領土の奴婢であるとてラッチェルに接近する。彼が注目した領土の類型は分析的な山や、川、海洋等の部分に關せるものではなくて、

主として歴史的活動を通じて見らるゝ國家の全體的な姿であつた。このライヒを持つ國家活動はこの領土の鋭敏なる支配をうけるものであることをまづ述べる。然しそれはラッテエルに見らるゝ如く絶對的なものでないことは靜かに彼の論理の發展を眺めなければ解らない。單にこの半面の類似を以て全く同類であると誤解するのは早計である。彼は語を續けてかゝる特性をもつ國家は一個の纏りをもち、他と明瞭に區別せらるべき地理的個體をなすとしてその有機的な「動き」を強調する、更に一步を進めてかゝる國家はそれ自身の生命力によつて創造進化すると言ふ彼獨特の立場をもつて國家活動全體の在り方を明示する、こゝまで來ると彼の「ライヒ觀」が明瞭にラッテエルと異なることが解る。ラッテエルにあつてはその前半である領土の慘酷な支配の中に鎖されたる國家觀であるが、彼チェーレンにあつては國家はかゝる支配をうけつゝ尙國家の生命力によつて創造進化し得るのである。

尙ほ本書中には領土の種々な問題、即ち國家のライヒに及ぼす反作用、國家の轉變とライヒの不滅性、其他空間形狀及び位置等の所謂地政學の基礎論が述べられてゐる。要するに本書の新鮮性は「その目標をば常に國家單位にむけ、且つ國家の本質の理解に貢獻せんとする」國家學の一體體であることにある。又その方法上の新鮮味は「分析」に非ずして、まづ歴史運動自身、即ちその「國家の踊りぶり」の中に直觀せんとした非合理主義に存する。往々地政學に對して論ぜられる如く、決してそれは自然的存在の如く機械的な對象として定立せられたものでも、客觀的な合理主義的認識方法でもない。地政學がかくの如きロマンチックな特色をもつ限りに於てそれは「目的論的」であり、「直觀的」把握の方法に立つ限りに於て「斷片的性格」を帯び、機械論的秩序から眺めて「無體系」ならざるを得ないのである。寧ろかゝる批判の浴せられる所にこそ地政學の本質的特色があり、近代合理主義の到達し

得ざる彼岸の解決への魅力が存する。

然し彼のかくの如き極めて嶄新なる主張も、當時の機械論の全盛時代にあつては、極めて神秘的な「天の一角よりの囁き」でしかなかつた。彼の主張は本國に於てさへ容れられず、獨逸に於ても否定された。其處にはまだ現代精神の未成熟があり、彼の主張が最もよき後繼者によつて生育されるためには戦後のドイツ社會の成熟を待たねばならなかつた。

① ルドルフ・チェーレン著 地政治學論 一頁 科學主義工業社 昭和十六年

阿部市五郎譯

② ハウスホーファー・マウル著 地政治學の基礎理論 五頁 化學工業主義社 昭和十六年

玉城 肇譯

③ 「生の哲學」 哲學辭典 三〇六頁

④ ルドルフ・チェーレン著 地政治學論 前出

阿部市五郎譯

(ロ) 地政學の獨逸的展開

チェーレンの新學說のために新しき後繼の苗圃を準備したのは戦後の獨逸であつた。餘りにも惨めな敗戦の結果は獨逸民族をして政治的、經濟的に壊裂と貧苦のどん底にたゞき込んでしまつた。然し彼等は決して滅亡しなかつた。殘されたる民族と領土とを一括して起ちあがらんとしたのである。彼等を救ふ唯一の道は民族の統一であり、領土の復活であつた。「君は君の國民を見、君の前面を見、廣く子孫を考へ、新しく生れいづるものゝ命を考へねばならぬ。われ等の前には土地狭き苦悶が立ち塞がつてゐるではないか。この狹隘な土地からはも早や肉體も魂も

すく／＼とび出づる土地がないのだ」「然し友よ、私は知つてゐる。私の子達も、私の一族も、又獨逸民族も畢兆するに同じであつて、そしてたゞ一つの運命になつて行かねばならぬといふことを。」この憐れな告白こそ當時の獨逸國家の眞實の姿であつた。

この燃ゆるが如き獨逸民族の理想を實現せんがために興望を擔つて起ち上つたのがナチスである。このナチスの政策が從來の抽象的な世界觀を排し、具體的な獨逸の現實政治と無關係な一切の論理の遊戲を否定した。然し常にかゝる轉換に當り、その論理的武裝を忘れない獨逸民族の通有性として、彼等が古典の世界に探尋して得た新論理がロマンチズムである。獨逸民族も亦所謂「いさゝで」の機械論をあつさり否定して新しき現代建設のため彼等自身の歴史を回顧して有機論を復活したのである。此處にも同様に文化のルネッサンスが見らるゝ。

こゝに於て論理の抽象的精密さをもつて誇りとして來た獨逸地理學界の一隅に所謂新思潮の地理學が擡頭し始めた。既述の如く「全體性」を契機とし、因果性を否定せんとする地誌學派の擡頭もその一部であり、又カールハウスホーファーを中心とする地政學派の活動も亦その一つである。

カール・ハウスホーファーは明治二年、アルプス北麓のミュンヘンに生れ、十九歳、明治二十年、陸軍士官として印度、東亞細亞、シベリヤ等を旅行、四十歳より二ヶ年間（明治四十一年—二年）バヴリヤ參謀本部の委嘱を受けて、恰も興隆期にあつた日露戰爭直後の日本に滞在、親しく日本を中心として起ちあがるとする亞細亞の動きを見學してゐる。恰も瑞典のチェレインが死去した大正八年、ミュンヘン大學の地理學の教授に任ぜられ、地政學の研究に従事した。彼は元來軍人として陸軍少將の地位にあり、且つ永らく大使館付武官として東洋にその職

歴をもつ一種風變りの學者として大學の教授となつたのである。その時地理學教室の助手として彼の薰陶を受け、後ナチス・ドイツの副總理として活躍したのがヘスである。ヒットラーはヘスを通じ間接、直接この香宿の熱烈なる感化を受けたのであつた。例のヒットラー、ヘス共に國事犯としてランツベルグの監獄に禁錮せられてゐた時、彼はその看取長と知合であつた關係から、屢々この牢獄を訪れ、青年時代の彼等に強烈なる地政學的刺戟を與へたのであつた。彼の研究の一部は既に大正二年頃から發表せられ、而も日本に關するものが主であつた。

然し彼の研究が意識的に地政學として發展し、獨特の形式をとるに至つたのは大正十二年頃からであり、ヘンニヒ、マウール、ハッシンガー、オプスト等と共に「地政學雜誌」を出版せる頃に始まる。彼はこの年「日本及日本人」、「東南アジアの自決への再現」等を發表してをり、彼の學的情熱の燃え立つた頃である。

彼は意識的にチェレインに近づき、ラツテルの研究に走り、その學風を繼承しながら、更に多少異なつた内容を與へた。彼の特徴は「地政治學概念の史的發展」に述べられる如く、まづ第一に地誌的色彩が強く、その研究は主として亞細亞の季節風帯及び太平洋空間に關するものである。第二に地政學を政治的生活形態の學問とし、その把握に當つて歴史の運動を通じて見られる地的制約性を強調する。彼は地形、位置、地質、氣候、海流、河川網、地震及び火山等の自然地理學的要素は勿論、人種の體格、移動、社會階級、原落、人口密度、世界交通及貿易等の人間に關する科學的研究をも全體の中に統合した。第三に彼の科學的勞作が戦後の獨逸に於て完成せられたといふ時代的性格の故に、その理想を實現すべき應用科學乃至は技術論であることにある。

獨逸に於ける所謂現代の成熟と共に彼の學説は歓迎せられ、ナチス獨逸の指導者達によつてどし／＼具體化せ

られて行つた。而もそれが「未來豫見」に偉効を奏するに及んで、より世界的に普遍化する原因となつたのである。

① ハンス・グリム著 星野慎一譯 土地なき民 大正十五年

② Karl Haushofer; Geographische Grundlagen der Japan 1, 911.

” Dai Nihon, Betrachtungen über Grass-Japans Wehrkraft, Weisung und Zukunft. Berlin, Mittler, 1, 913.

” Die Geographische Reichs entwicklung. 1, 920.

” Das Japanische Reich in seiner geographischen Entwicklung. Wien, 1, 921.

” Japan und die Japaner. Eine Landes- und Volkskunde. B. G. Teubner, Leipzig und Berlin, 1, 923.

③ ハウスホーフアー、オプスト
ラウテンザフハ、マウル共著 地政治學概念の史的發達 二六一—三〇頁 科學主義工業社 昭和十六年

(ハ) 地政學とは如何なる學か

地政學の流行と共にその本質の究明についての論議が繰り返され、甲論乙駁、遂にその結論に達しない。凡らくそれは各自の勝手な立場に於て理解せられ、特に政治地理學との差違に至つては殆んど曖昧のうちに葬られてゐる。元來地政學はチエレーンによつて創始せられ、獨逸社會に於て發達したものである。我々は往々にして形に捉はれることに急にして、そのもの自身の發生した歴史的时代乃至は場所について無關心であり過ぎる。然し眞に「ものゝ正體」を究明せんとせば、その發生した時と所とをまづ理解せねばならぬ。それはそのもの自身の本質を知る

ことであり、根元を尋ねる事である。チエレーンの保守黨議員と言ふ思想的經歷、又當時漸く芽生えつゝあつた理想主義的傾向が「自然科學」的方法にプロテスタントとする「生の哲學的」方法としてまづ具體化したのが彼の國家學である。まづ我々はその發生した地盤に於ける「世界觀」の差違を卒直に認めなければならぬ。

既述の如く二十世紀初頭以來、自然主義、唯物主義に對する反動が徐々に擡頭してゐた。機械の中に窒息してゐた人間の主體性の回復を目指す努力が續けられ、特に「人間」自身に關する研究は増加した。古き傳統よりの解放は同時に新しき何ものかへの繫縛である。その新しき原理が「有機體の原理」であり、動きをもつ「生そのもの」の原理である。十九世紀前半を風靡したロマンチズムは巷に復活せられ、その統一の中心であつた「神の意圖」に代つて「生そのもの」の中に創造進化の力を認め、「生」そのものを把束せんとしつゝあつた。

この努力の結果はすべての動きの原因として絶對的であつた「因果律」を排して「相互作用」に走り、「時」に對する根本的な世界觀の革命となつて具體化した。機械論に於て因が果を決定し、その果が又因となつてその結果を規定する如き連續的な直線的動きは少くとも人間に關する限りに於て否定された。然るに交互作用にあつては一方は自己の結果である所の他方によつて決定される。即ち過去の傳統に必然的に規定せられながら尙且つ未來の希望と要求とにより忠實に行動しさへすれば新な現實をつくり得るのである。それはも早や單なる因果ではなくて、自分が自分を決定するといふ自發性をもつ交互作用である。即ち過去と未來を含む全體としての自分が現實の自分を決定するのである。即ちカール・ハウスホーフアーが「地政學は土地と強く結ばれながら而も歴史的變動を續ける生活領域に即して生活する國家についての學」といふ定義はこの間の微妙なる關係を表現せるものである。従つ

て政治地理學の如くに單なる直線的な運動をなせるものを一瞬止めて之を分析するのではない。

かゝる「時」に對する觀方の轉換に必然的に「空間」に對する觀方の革命を隨伴する。對象は單なる靜止せるものではなくて、常に創造進化しつゝある動きであるとすれば、これを機械的な單なる集合とすることは出來ぬ。それは一つを中心によつてすべての周縁が統制せられ、周縁は又各々その地位に於て獨自の任務に服しながら中心に向つて歸依朝宗する「有機體」である。

この時空に對する根本的な觀方の轉換こそ新理想主義の獲得した新しき世界觀であり、すべての「統一の原理」である。地政學はこの一群の思想的所産である。簡單に「政治現象の地的束縛性に關する學問」として、恰も經濟現象の地的束縛性を研究し、之を因果の體系に於て説明する經濟地理學の如くに理解することは、その形や、枝葉に拘泥せる末節論である。所謂その意味する「政治現象」は「即國家活動」であり、ある意圖をもつ「創造進化をなす生きた國家」である。地政學はかゝる國家學の體系の中に於ける一肢體であり、領土といふ獨自の性質に應じて身分化した「分身」である。従つて自然科學的體系の中に於ける孤立的、自律的な「獨立科學」としての政治地理學ではない。政治地理學は因果律の上に立つ獨立科學であり、地政學は交互作用の上に立つ國家學の一分身である。兩者の間には明かにその立場の相違があり、時代精神の差違がある。我々はまづ兩者の差違もこの明瞭なる區別の上に出發せねばならぬ。従つて地政學は過去を背負ひ、未來を孕める現實を對象とし、政治地理學として持ち合せない未來の要求から「かくせねばならぬ」といふ「當爲の面」をもその中に含み込むのである。然し單に又地政學を「當爲の學」「應用の學」と規定するのは又その一面のみの形態的觀察である。地政學はこの過去と未來、

存在と當爲の兩面の上に立つのであり、一方的な偏見的主張ではない。

かくの如き地政學の基本的性格から種々の形態的特色となつて具體化するのである。まづ常にその目標を國家にむけ、すべてをこの一途に集中せしめんとする形は總合科學となり、自律的、孤立的な框の中に踞踏せずして、必要でさへあれば異質的な科學を夫々その傘下に結びつける所に架橋性が生じ、又未來の要求から「かくせねばならぬ」とする所に應用性が生まれ、それが常に具體的な場をもつ所に實踐性、行動性が生まれるのである。かゝるあらゆる性格はすべて現代的特色をもつ地政學独自の多彩なる表面形態である。

然し此處に一考すべきは「いま」の政治地理學が、現代的に變貌するとすれば當然かゝる地政學に變質するであらうことである。我々は餘りにその差違のみに捕はれ過ぎてゐるが、學問は時代と共に發展する生命體であり幾變轉を重ねるも、尙その中に不變不動のものが一貫して流れてゐる筈である。變化の中に普遍を、普遍の中に變化をもつことが文化發展の特相である。即ち地政學の中にも「國家の地的束縛性」、「土地に縛られながら」はそのまま、「自然と人間との間」であり、「歴史と舞臺との關係」であり、これこそ近世地理學の巨匠達が我々に殘し傳へた遺産である。この不易の傳家の遺産、獨自の性質の上に地政學も亦根ざしてゐる。その世界觀の轉換は發達史を通じて常に見らるゝ所であり、敢て我々の時代人のみがこれを嫌惡すべきはでない。正しく地政學は地理學の新なる時代的展開の一つであり、新装を整へて我等の眼前に現はれた政治地理學である。時代の要求に従つて國家的に變貌したに過ぎない。然し如何なる轉換も「地に即し」なければ砂上の樓閣である。人間生活が時と所に應じて如何に變化したとしても手は手としての獨自の性質に應じてその仕事を變へて行くのが本分である。手が足の仕事

をなし、足が手の仕事をなすやうに變ることは人間生活それ自體の破壊であり、所謂「地に即せぬ」轉換である。地政學が「地的束縛性」の傳家の遺産の上に立つことは地理學獨自の本分であり、地につくことである。

然し地政學への變貌は決して古き既成陣營の人達を喜ばせたものではなかつた。古き傳統を守る人達から見れば、確に妙に「御用風」を吹かせる若者であり、親の言ふことをきかぬ「地理家族のならず者」であつたかも知れない。親に似ぬ子即ち「鬼子」の主張が概して憎まれ勝ちであるのは何れの社會も同様である。素朴である、無内容である、體系を缺く等の批評は常に既成陣營から浴せられてゐた。然しそれが素朴であり、弱年であることはそのまま、價値がないのではない。自然科學的方法のみが科學であると信じてゐる人達を置去りにして時代は刻々に變貌してゐる。「生きもの」をそのまま、認識せんとする直觀的方法に合理性がない、體系を缺くと言ふことは女に髻がないと言ふことに似てゐる。人間は盡く男でもなければ、學問はすべて自然科學ばかりではない。學問に一元性を持たせんとする熱望はそのまゝ合理的段階にとゞまれと言ふことではない。新しき時代は廣漠たる滿洲の平原に新京の如き大都市を建設し、近頃の「青い者」はと憎まれてゐた青年が眞珠灣攻撃に、ジドニーの攻撃にと笑つて國のために死んで行く。又ふりかへれば東京もその始めより大都市ではなかつた筈であり、老人もまたもつと理想に燃えた青い時代があつた筈である。

(二) 地政學の我國への輸入

我國に於ける地政學の輸入は決して新しいことではない。それは既に西南獨逸學派の新思潮と共に運ばれ、早く

も大正の末期頃から紹介されてゐた。大正十四年「地理學評論」一ノ八に紹介の勞をとられた辻村助教の「政治地理學、オットー・マウル」、同じく一ノ九、十、二ノ一の「人種鬭争の事實と地政學的考察」はまづその最初のものであらう。石橋博士が昭和二年「地學雜誌」に「政治地理學と地政學」を掲載されたことや、佐々木彦一郎氏の「デオポリチクとエコノミック・ヂョーグラフィ」(地評三ノ四)、飯本教授の「所謂地政學の概念」(地評四ノ一)、阿部市五郎氏の「地政學概念の史的發展」(地理教育五ノ三)、黒正博士の「日本經濟地理學」中の紹介(昭和六年)等も蓋しその初期の紹介である。

然し少數の人達によつて熱心に紹介せられたるにも拘らず、當時自然主義の黃金時代のために、僅かに一部の人達を除いては殆んど見送りの形に置かれたのであつた。又それが注目せられたとしても單なる政治地理學の應用とか、動的研究等として理解せられたに過ぎず、甚しきに至つてはその非合理性の故に學問の世界から葬り去らんとする傾向さへ見出された。然し時局の滔々なる流れの發展は我國も亦最もよきその苗圃と化し、寧ろジャーナリズムの世界に於て盛んに歡迎せられ、新聞に、雜誌に書きたてらるゝに至つた。それは昭和十年頃からの新傾向である。この新傾向に處して地理學の世界に於ても再び回顧せられ、その研究者、紹介者も次第にその數を増加して行つた。岩田孝三氏、國松久彌氏、阿部市五郎氏等はその先達であり、江澤讓爾氏、金生喜造氏等の他の畑の人達も亦どしどし地政學に近づき、有名、無名の新聞、雜誌等に地政學の名が喧傳せられるに至つた。

勿論それは獨逸地政學の直譯であり、主としてハウスホーファーの譯書が多く見られ、彼の著になる「太平洋地政學」や「世界的列強及帝國としての日本の生長」等が翻譯されてゐた。然し譯書は何處までも譯書であり、「い

まゝで」の文化を清算し新世界の創造にのり出した日本、その自主性を自覺しすべてのものを「大御稜威」の根元に結ばんとしつゝあつた日本にとつて、單なる紹介はも既に近代的遺物でしかなかつた。日本は日本の力によつてかゝる空間的憧憬を眞向から排除し、自己自身のあるべき根元を求めて進みつゝあつた。日本的なるものは日本としてあるべき根元に結ばれつゝその獨自の性質に應じて特定の任務をもつものでなければならぬ。日本的なもの、所謂結びの中心は「大御稜威」である。それ／＼その獨自の性質に應じて特定の任務を果すことがそのまゝ「大御稜威」に歸依朝宗することではなければならぬ。單なる國家や、民族に結ぶ地政學は瑞典の地政學であり、獨逸の地政論である。

この意味に於てこの大業の先頭に立ち、まづ日本地政學の建設に没頭されたのは小牧博士である。

(ホ)小牧實繁博士

小牧博士の學歴その他に就いては博士の著になる「日本地政學宣言」中の「修學院雜記」に詳かであり、再び此處に轉載の愚を避ける。たゞ此處では恰も東大地理の佐藤、飯本兩氏と期を同じくして、大正十一年、京大地理科の卒業であり、當時の秀才の常道を型の如くに踏まれて、大學院、助手、講師、助教授、教授と果進せられたことを述べれば足りる。勿論薫り高き歴史地理學風の京大に生長せられた關係から理科系統の東大學派の人々とは自らその行き方を異にされ、「先史地理學」や、歴史時代に入つてからの「歴史地理學」が教授の前半生の研究であつた如くである。機械論的自然主義の全盛時代とその前半生を送られた關係から、著述に、論文に多くの眞面目な學

績を残されたにも拘らず、佐藤、飯本兩氏に較べて必ずしもその前半生は華々しくはなかつた如くである。昭和十一年停年退職により、石橋博士を送つて以來、教室の主宰者として第一線に進出、昭和十二年宿願の文學博士を授けられ、昭和十三年四月、教授に進まれたのである。博士の學位獲得は我が維新以來の地理學史上特筆すべきことであつた。それは明治四十年、我國の大學に地理學教室が設立されて以來、最初の教室出身者としての博士であつた。恰も東大地理の鬼才、吉村信吉氏の理學博士と共に後世ながく記録されるべきことであらう。

博士の偉大なる日本地政學建設の大業は、昭和十二年、和蘭に於ける萬國地理學會に出席の頃から芽生へた如くである。自然主義と人間主義の對立以來頃にその動きは活潑化し、學界の一隅に重きを加へつゝあつた博士の精神的遍歴も、この頃になると漸く一つの安定點を見出し、その向ふべき所を決された如くである。博士の新出發の門出となつた最初の決意の表明は「地理學に志す人へ」の如くである。本文は昭和十三年十一月五日發行の京都帝國大學新聞に掲載され、若き學生達へ與ふる教室からの決意の表明である。曰く「現下我が國策が眞の地理學に一つの基礎を見出さうとしてゐることも亦事實であります。新たなる日本地理學から發展すべき、新たなる日本地政學が、歴史的傳統的なる日本精神と共に、吾が國策の基礎でなければならぬことも勿論であります。」とて日本地政學建設の意圖を表明され、所謂「いまゝで」の既成地理學、文檢地理學の清算を高唱されたのであつた。これに續き、昭和十四年三月十五日、上海維新學院學生に與へられた「新秩序建設方法論」は、歐米の東亞に於ける謀略史を説き、東亞に於ける日本の位置的、氣候的優秀性を基礎として、元來東亞は日本を中心として一つの統一體であること、蔣介石の無謀はとりもなほさずこの天理に悖る英國、米國等國際資本の謀略にすぎざること、日本の理想

とする所謂新秩序の建設はかゝる侵略的なものとは異なり、搾取なき、壓迫なき、日本傳統の「皇道」に根ざせるものであること、かゝる理想的な生命體としての大亞細亞の建設は本來平和的互讓の中に成立すべきであるが、餘りにも歪曲せられたる矛盾克服のために止むを得ず「神武」を以てたちあがらざるを得ざること、従つて大東亞の建設はまづこの歪曲克服にあり、その第一着手として英米よりの解放を通じて吾が「皇道」に結ぶことにあること、その推進的結合としての日滿支の結合状態及びその國防關係の解明であつた。本論こそ博士の「皇道」に結ばんとする最初の具體的表明であり、新地理學具體化の片鱗であつたのである。博士の今後の思想的展開は實にこの中心を樞軸とするのである。

次に教授の意圖の全貌を吐露せられる結果となつた「日本當來の地理學」は、ながき思索の末、昭和十五年二月五日稿せられた。曰く「從來の地理學はイデオロギー的には無色を擬しつゝ、而も其の實竊かに歐米的世界の現状を強化せんとする色彩に塗りつぶされた地理學、現状の強化を正當化せんがための理論を追及する地理學に非ずんば、マルクス主義強化の地理學ではなかつたか。殊に前者にあつては或理念によつて現状を打破せんとする新學説が生れいづれば、之に對して、現實を現實の範圍内に於て研究するのが科學の本體であつて、あるべき姿と結びつくのは科學の墮落であるとの思想を扶植し、以て革新的意志を拒否したのである」と。全く教授の痛罵を待つまでもなく、所謂いままでの地理學は「である」の因果律による説明科學であり、「かくなければならぬ」といふ交互律による實踐的要求を満足せしむるものではなかつたのである。西南獨逸學派の流入以來、我が地理學界に於ても新地理學創造の陣痛に悩み、あらゆる探究が試みられたのであつたが、獨立科學といふ鐵則から因果の系列を清算

し得なかつた。「かゝる思想的欺瞞を打破し、新しい理念によつて指導せられる、現状打破、現實改革の地理學、全世界を光被し、全人類をして各々その所を得せしむるに足る如き理念によつて指導せられたるものでなければならぬ。」この中にこそ博士の自覺の根本が存する。新しき理念、これこそ「皇道」であり、「大御稜威」である。八紘爲宇の大理想である。この大理念に指導せられつゝ地理學獨自の性質に應じて特定の仕事に従事すること、此處にこそ日本地理學の特色がなければならぬ。我が大日本帝國は萬世一系の現人神にまします 天皇、天祖の神勅のまにまに、永久に之を統治したまうのであり、卑しくも日本人であり、日本文化である限りに於て、この「御垂範」の如くに「大御稜威」の下に夫々その獨自の仕事に従事すべきである。單なる個人の考へを以て事を律し、學問自身の權威によつてこれを建設する行き方は正しく歐米的な個人主義的行爲である。所謂いままでの歐米的學問の清算はまづこの「大御稜威」に結ぶことによつて再組織することに始まらねばならぬ。地理學も亦その怪し氣なる獨立性の主張を捨て、まづこの「大御稜威」に結ばれねばならなかつた。八紘爲宇、萬邦兆民をして各々その所を得させしめ給ふ「大御稜威」の指導を受けつゝ、この中心に歸依尊崇すべきであり、そのために地理學獨自の性質に應じた仕事に従事すべきである。こゝにこそ現代地理學の建設は存する。博士の業績の最大なる貢獻は正に此處に存するのである。所謂「アカデミック」な、言はゞ歐米的思想の巢窟として考へられてゐた研究室の深叢に育ちながら、自らその重壓を脱し、多くの反對者の前に毅然として立ち、正しき行き方を主張して譲らざる決死的の博士の行動は正に「志士」としての態度に恥ぢざるものである。

博士によつて地理學は「皇道」の分節に變貌し、この皇道の統制を受けながら、その獨自の職分を通じて中心に

歸依朝宗する所謂日本地政學と發展したのである。「かくて我々の地理學は現状のままの諸事象、現状のままの諸關聯の考究、謂はゞ、存在の科學のみに終始せず、當に實現せらるべくあるべき姿の顯示、あるべき諸關聯の考究、謂はゞ『當爲の科學』としての性格を具有して來る。」と述べ、新地政學の「交互作用」の原理に立つ性格をのべられる。かゝる形態的に見た性格はもとより獨逸地政學に類似する。然しそれは何處までも類似である。日本地政學の統一の中心は明かに「大御稜威」であり、「皇道」であり、彼に於ては「國家權力」であり、「民族」である。我にあつては何處までも萬邦兆民をして各々その所を得せしめんとする愛の原理に則る翼賛學であり、彼にあつては民族乃至は國家の生活的意圖を満足せしめんとする力の原理に則る政策學である。博士はこの關係を次の如く述べられる。「獨逸地政學は、國家を行爲する力として捉へることから出發する。この學が歐羅巴的世界に誕生した以上、我々が茲にも歐羅巴強權主義の發現を見るのは不思議でない。而して、かゝるものが永く吾々を満足せしめ得ないことは又餘りにも當然である。吾々の究極の目的は皇道を世界に宣布すること、八紘一字の精神を世界日本に具現するにある。この故に吾々は國家をば倫理體、道德體として把握しなければならぬ。」と。尙この間の詳かな博士の所信は、昭和十五年八月「日本地政學の指導原理」として示された。

かゝる立場に立つ博士の對象觀及びその方法論は「日本當來の地理學」と同時に「地理學より地政學へ」の小論に示された。まづ「自然には自然の可能性乃至は潛勢力とも稱すべきもの、換言すれば、地的空間の力とも稱すべきものが包藏せられてゐる。これを正しく開顯し、正しい歴史を創造するのが正しい人間の使命である。人間は自然の被造者ではあるが、人間の創造的性質、人間生活に於ける主體的意志活動を否定することはできない。人間は固

より驕慢であつてはならない。正しい自然の認識が先づ前提として要請せられる。併しながら、人間は又自らの意志を信じなくてはならない。」とて、自然主義對人間主義の對立についての暗々裡の解決を與へ、何れにも偏せざる博士の態度を明かにされる。凡らく博士の心中は自然に必然的に縛られながら尙且つ人間の意志によつて動かし得るものが對象であると言ふ「交互作用」の理論を表現してゐられることゝ信する。それは全く自然の拘束の中に動けぬ様に縛られたまゝでも、又人間の意志によつて自由に改變し得るものでもない。此處に「いま」の一方的な對象觀と異なる立場が提出されてゐることを見出さなければならぬ。「世界新秩序建設の大業は、時間の軸に従ひ縦に過去、未來を貫き以て未來を指向する歴史と、空間の軸に沿ひ横に中心、外邊を連ね以て世界を一帶とする地理と、兩者一如の綜合的、全體的、統一的研究に俟つところが多い。此等兩者一如の研究の上にこそ事物本然の姿は明らかにせられ、かゝる本然真正の姿の實現こそが即ち皇道の開顯に外ならない。」と。

博士の方法論的意圖は皇道光被の立場に立ちて對象自身の本然の姿あるべき姿を知ることが目的であり、この本然の姿の實現こそ皇道の開顯である。そのために地理・歴史一如の綜合的、全體的研究方法を採ることになる。従つてまづ理想を明徴ならしむることはすべての研究の前提となり、あらゆる研究を根元に統制する原動力となる。博士の名言を以てすれば「確固たる方法の缺如は何に由來するであらうか。實にそれは理想そのものゝ明徴化の不徹底にあるのではなからうか。確固たる方法の發見、血路の打開は理想そのものゝ明徴を前提とする。」(時務三則)と。従つてこの大御稜威の下に對象のもつ本然の姿を指示することが地政學本來の使命となる。その具體的方法として地理・歴史一如の研究方法をとるのである。一如とは全くごちや／＼にすることではな／＼、この大目的の指

導の下に地理は地理、歴史は歴史としてその独自の性質に應じて中心に歸依奉仕することである。所謂有機的に一體化することである。例を博士の「東亞の地政」中の「蒙疆」の章にとつてみやう。「蒙古高原は陰山山脈の地壇を境として南の方、支那中原に臨むこと、恰も東の方、大興安嶺により滿洲平野を俯瞰するの形勢と相等しい。」とて、此處が地理的に高原民族の南下するに適する性格をもつことをまづ指摘し、次いで「古來漠北の民族は容易に此の境界山脈を下つて中原に進出し得たのであり、漢民族は春秋戰國の頃よりこれに悩まされ、萬里長城を築いて國境の守備に當てた、云々」と歴史的にこの地が兩民族の交界地、争闘場であつた事實を示される。かゝる本來の姿である所が現在は漢民族の懷柔により著しく蒙古族は後退し、今この地は漢人の居住地化してゐるが、本來の性格から見るとそれは誤りであるとして現實を否定し、蒙古民族大同團結のために「察南、晋北の地がこれに協力することは、蒙疆の歴史の勢力範圍の考察からして決して不當ではなく」又日滿支防共協定といふ皇道の立場から「蒙疆をして防共廻廊としての役割を十二分に果さしむる爲には、これ等兩地域を蒙疆に連結せしむることは、絶対に必要」であるとして、その向ふべき本来の姿を指示されるのである。博士のすべての方法論はかゝる意圖的形式の上に展開し、その本来の姿を指示することに注がれてゐる。

かゝる方法論の下に昭和十五年二月十三日稿の「英國謀略地政史」その他の具體的研究となり、尙斯學が決して早卒の間に成れる單なる思ひつきに非ずして、日本地理學史の底流に脈々として波打てるものであり、日本地政學は或意味に於てその復古にあることの證として「日本地政學小史」、「幕末志士と日本地政學」を物され、最後に昭和十五年八月二十三日、「日本地政學宣言」の公的宣言となつて現はれ、昭和十五年十月十七日の「日本地政學宣

言の單行本の發行となつて具體化したのであつた。

本書は正しく日本地政學擡頭の初期、即ち啓蒙期に於ける贈物であり、因果律による分析的地理學の行詰りに對する新鮮なる急救劑として、偉大なる覺醒への警鐘であつた。本書のもつ新思想は恰も舊教世界を席捲した新教の如くに、時代の熱狂的な歡迎裡に迎へられ、獨り地理學界のみならず各學界乃至はチャーナリズムの世界にも嵐の如き歡迎を受けたのであつた。かゝる機運に乗じて博士を中心とする所謂京大地理の若き學徒達は、恰も維新の志士達の如き感激をもつて、斯學の建設に憂身をやつし、遠近を遠しとせず隔週土曜日の研究会に馳せ參じ、各々博士の指導の下に特定の新研究を續けたのである。かゝる若手群の新研究を盛つて充たされた「地理論叢第十一輯」を皮切りに、高足米倉二郎氏の名著「東亞地政學序説」、川上健三氏の「ナチスの地理建設」等が續々出版せられ、やがてこれ等一群の研究團體によつて構成された「世界政治地理大系」の第一回配本、別技篤彦氏の「蘭印」、第二回配本室賀信夫氏の「印度支那」等續々刊行、大東亞戰爭勃發を前にして正に地政學の大流行時代を現出するに至つた。これ等の出版物に共通せる高き臭は、博士の意圖がそのまま具體的ににじみ出てゐることであり、即ち皇道實現の立場に立ちて對象の本来の姿を示さんとしてゐることである。この基本的性格を樞軸として何れも地理、歴史一如の方法論に立ち、日本の優秀性を自覺し、大東亞の親近性を通じてその一體不可分性を論じ、この本来の姿をもつ各對象の歐米謀略による現狀を否定し、その歪曲せる姿を指摘せることであつた。

本項の記述は主として博士の「日本地政學宣言」に據つた。

(へ) 地政學の流行と雑誌「地政學」の誕生

元來地政學は既述の如く時局の進展と共に再輸入せられたものであり、特に世界第二次大戰の勃發と共にナチスの鮮かな作戦が地政學に指導せられつゝあることを知り俄かに朝野を擧げて歡迎するに至つたのである。而もそれは寧ろ軍部、政界、財界、ジャーナリズム等に重視せられ、地理學界に於ては却つて白眼の狀態であつた。然し小牧博士の巨彈によつて地政學は地理學界の中心に据えられ、學界をあげてその正體の究明に精進するに至つた。

雑誌「地理學」は早くも昭和十六年二月、「地政學特輯號」を送り、江澤、匠嗟、金生等諸氏の論文を載せ、引續き佐藤、綿貫等諸氏の斯學に對する研究や、批判等を送つてその啓蒙的紹介にのり出した。雑誌「科學ペン」は九月號を「地政學特輯號」に割愛し、小牧、江澤、國松、阿部、金生、田間等諸氏の地政學觀を載せ、其他改造、現代等に至るまで地政學的論文が挿入せらるゝにことゝなつた。又單行本にもチェレン、ハウスホーファー等の譯書が亂發せられ、一市井の會社員の手にもまで地政學書が握られる時代がきた。この傾向は昭和十七年まで續き、岩田孝三氏の「地政學」、國松久彌氏の「地政學とはどんな學問か」等の普及本、太平洋協會の譯出になる「太平洋地政學」等の出版、或は講演、ラヂオ等の地政學の發表等全く枚舉に遑なき地政學時代が訪れた。

かゝる氣運に乗じて地政學に一つの中心を與へ、その方向を統一せんとする中央的研究機關として「日本地政學協會」が創立された。軍部、政界、學界等の有力者を顧問、賛助員、評議員等に戴き、斯界の輸入紹介者として古き因縁をもつ飯本信之氏を常務理事、會長に海軍中將上田良武氏を中心として船出することゝなつた。それは昭

和十六年十一月十日のことであり、正に大東亞戰爭勃發寸前であつた。恰も明治維新、政界、外交界、軍部等の指導者階級によつて「地學協會」が創立せられた事情も亦これに類似したものであらうか。

宣誓に曰く「われ等職分奉公の誠をいたし科學性を具有する日本地政學の育成に努め、創意と能力とを最高度に發見し、以て皇國の理念及びその體制に結集すべき國防科學的體系の樹立に寄與せんことを誓ふ。」とあり、國防科學的體系に寄與すべき「國家活動の理論的基礎」を明確にせんとする科學的日本地政學として意圖された如くである。尙ほその「日本地政學協會の使命について」の中には、舊來の孤立的な地理、歴史を綜合して一つの國家學的基礎づけとして新科學を興すにあること、その研究對象は主として民族、地域又は生活圈であり、かゝる研究の成果が國策に寄與し得べきこと、而もこの研究は日本を中心として行はるべきこと等が誌され、從來の所謂地理學より急轉して國策學の色彩を濃化せんとする意圖をもつものであつた。察するに之を以て澎湃として興りつゝある地政學的研究の強力なる全國的機關となし、日本地政學者の總力を結集せんとするにあつたものと思はれる。然し不幸にして小牧博士を中心とする京都の一團は之に参加することを潔しとせず、遂に本會に加入しなかつた。

第一卷第一號は昭和十七年一月發行、神川博士の「世界新秩序と大地域主義」、石橋博士の「地政學の發達とその職能」等の論文を始めとし、井口一郎氏、飯本信之氏、植田捷雄氏、松下正壽氏等の論說其他を収録せるものであつた。これ等の論說を通じて眺められる雑誌「地政學」の特色は、その宣言の如くに國防科學への理論的基礎としての合理的探究に主力が注がれてゐる如くである。尙その記述の様式に至つては既成的殘滓に満ち、新鮮味に乏しき感を與へてゐる。

惟ふに地政學は現代日本の現實的要求に根ざせるものであり、歴史的必然の時代の所産である。それは領域とか國家活動を對象とする單なる理論科學ではない。一部の人達によつて固執される如く單なる科學の應用、擴充の範圍に於て理解せられたとすれば、地政學の前途は遂に憂ふべきものである。地政學は既にチェレンによつて示された如く、生々發展する國家學の一體であり、政治地理學のこの大目的に沿うための再組織である。そのまゝ既成的な秩序を中心に結びつけても、有機的秩序をもつ地政學になるのではない。まづ我々は地政學を考へる前に近世科學のもつ秩序を一摘し、有機科學のもつ新しき組織を理解せねばならぬ。徒らに從來の科學觀に拘泥し、その合理性の探究のみに固執する時は、再び抽象の學、分裂的な學問として古典的な科學陣の中に追放せられるであらう。もとよりさればとて地政學に合理性は必要なのではない。如何にそれが巧みに中心に結ばれ、有機的に一組織を構成してゐたとしても、合理性をも満足せしめ得るものでなければ、又徒らに「神秘的」な存在に終るであらう。それは何處までも「合理的」でなければならぬ。近世合理的精神を經由した現代は、合理性をも含めてより高き立場に安定しつゝある。然し我々が此處に反省しなければならぬことは、或は中心を強調することによつて神秘的に流れ、又は部分の存在を主張することによつて合理性のみを強調し、各々一方的な偏見に走ることである。現代は正しくこの兩者を止揚し、部分は各々中心の統制をうけつゝ、獨自の任務に従ひながら中心に歸依朝宗する新しき性格の時代である。

日本地政學がまづ「大御稜威」の下に再組織されねばならぬことは單なる論理や、實際ではない。それは理論を超えた嚴然たる日本文化としての「在り方」である。理論的にそうしなければならぬからといふ理論に權威があるの

のではない。日本に存在する限りそうあらねばならぬのである。文部省編「國史概説」の開卷第一頁の冒頭に「大日本帝國は、萬世一系の 天皇が 皇祖天照大神の神勅のまにまに永遠に之を統治あらせられる。これ我が萬古不易の國體である。」恐れ多くも一天萬乘の現御神にまします 天皇がこの大道を率先御垂範遊されるのである。「而してこの大義に基づき、一大家族國家として億兆一心聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を發揮する。これ即ち我國體の精華である。」あらゆる日本に存在するものはすべてこの下に結ばれてこそ始めてその生命力を得、各々その所を得るのである。淺はかな個人のめぐらす理智による理論によつて、それが合理的であるから等とは以ての外のことである。勿論このことこそ日本に於ける至高至上の合理性である。即ちまづこの中心に結ばれ、これによつて再組織される所に日本的變貌の出發が存する。この大御稜威即ち八紘爲宇の大精神は如何なるものゝ攝取をも辭せないが、それはそのまゝ攝取されるのではなくて、常に「醇化」が伴つてゐる。此處に中心理念の指導の下に再組織が必要なのである。即ち分身化される時既に日本的に攝取醇化、即ち再組織されねばならぬのである。一旦再組織化に成功すれば何處まで合理の世界を細かに探尋しやうと、如何に微細に分析されやうと、それは論ずる所ではなく、寧ろ合理化され程よく、緻密なる程望ましいのである。

特に最近の段階に於ては戰爭が長期化し、機械戰に突入しつゝある。今や我々はこの大理念の下に愈々斯學を深め、擴めて、合理性を探究せねばならぬ時代に迫られてゐる。今こそ地理學徒は起ちてこの第二の現實的要求に答へねばならぬ。徒らに「是非をあげつらう者は又是非の徒」である。たゞもう我々は現在如何にすれば「大御稜威」に沿ひ奉ることが出来るか、一心不亂に與へられたる仕事に没頭すべき時である。それこそ大御稜威の下にかたく

結ばれて領域、共榮圈、勢力圈、住民、國土計劃等の具體的問題に對して現實に即した研究をなすべき時である。單なる普遍的な理論をもてあそぶ政治地理學的研究は實はもう澤山である。

(三) 國土計劃

(イ) 國土計劃の發生的意義

國土計劃とは、緊迫せる現實に直面して高度國防國家完成といふ一大目的のために、國土の空間的秩序を再建設せんとする計劃であり、國土のもつあらゆる機能を総合的に合目的に、計劃せんとするものである。それが國土を對象として計劃される限りに於て、地理學と密接不可分の關係に立ち、地政學と共に現代地理學に著しき影響を與へつゝある。

元來國土計劃の發生地は蘇聯である。彼等の社會主義的建設は對内的にも對外的にもその好敵手である資本主義との争闘を前提とする。従つてその争闘的組織として國防國家の建設は彼等の一大理想であらねばならぬ。はしなくもかゝるよこしまな彼等の野望を實現せんがため、昭和四年以來實行せられたのが第一次の「ゴスプラン」である。彼等はこの目的の下に産業も、國防も、あらゆる文化も、すべてを擧げて再組織し、まづ國防國家を確立し、國內體制を整備して然る後に世界赤化の大理想を實現せんとしてゐる。所謂ドンバス、ウラル・クズネツツ、東西

比利亞等の重工業地帯の建設、全國に行きわたるコルホーズ、ソフォーズ等の農業建設は着々としてその緒についた。即ち國土計劃は發生的には彼等の憎むべき非望を實現せんとする野望にその端を發してゐるのである。

この戦慄すべき野望の前に立ち、その鋭鋒に直面する日本と獨逸は、差し當り彼等の目標となつたのである。特に突然滿洲事變に突入した日本にとつては、獨り蘇聯の脅威のみならず世界の列強を向ふに廻し、その大理想達成に突進せざるを得なくなり、さし當り日本と滿洲とを結ぶ日滿五ヶ年計劃に突進し、やがて支那事變への擴大と共に日滿支計劃となり、更に大東亞乃至は世界新秩序建設の大計劃へと發展したのである。同様に獨逸に於てもナチスの擡頭以來、彼等の大理想民族國家確立のために、まづ失業對策に端を發する國土計劃に起り、やがて國防國家達成への實現となつて具體化することゝなつた。かくて蘇聯に起つた國土計劃の渦は益々擴大して世界を蔽ふに至り英、米、支等の國々に至るまで國防國家確立に大童となるに至つた。

かくの如く國土計劃はさし當り高度國防國家體制確立への理想を實現せんとする空間的秩序の再建設として普遍化したものであり、すべての都市計劃、農村計劃、工業計劃、商業計劃、交通計劃等の如き孤立的、自律的な機械的計劃を揚棄して、國家自身の手によつて國家の意圖する線の下に総合的に有機的計劃を樹立せんとするのである。従つてそれは國土の自然的發展に對處せんとする彌縫策ではなくて、豫め國家のあるべき理念から割り出されたる具案的再編成である。それはまた大膽に「いま、で」の空間秩序を否定し、あるべき新時代の秩序に立脚して、すべての空間的存在を再組織せんとする意圖的、有機的計劃である。此處に國土計劃の新鮮性があり、現代性がある。元來自由主義的秩序に於けるすべての空間的配置の中心は經濟にあり、利益に存してゐた。従つてそれは利益で

さへあれば如何なる空間的配置も許され、その重複や不足は問題ではなかつた。例を我國にとつて見ると、工業は英米に依存するの餘り太平洋岸、特に京濱、中京、阪神、北九州等の交通便利な、労働力の得安い地點に集中し、實に四大工業地域のみで内地工業總産額の約七十%が生産されてゐた。これにつれて人口も益々大都市に集中され、近年に於てもその傾向は是正されなかつた。大正十年より昭和十年に至る十ヶ年の内地の人口推移は全國的に見て一五・九%の増加率であるに比し、百六十都市の増加率は三二・六%、二倍強であり、就中重工業都市である川崎は六九・七%、尾崎は六七・四%、八幡は六二・四%、佐世保は五三%、小倉は五一%、横須賀は四八%等の飛躍的增加を遂げた。然しかゝる都市膨脹の反面には農地の潰滅と、農村労働者の轉出となり、農村の疲弊は著しく、正に農村は青壯年層を失ひ、養老院であり、幼稚園であり、結核療養所と化せる感があつた。

かゝる空間的配置は單なる利益本位の秩序としては許され得たとしても、現代國防の見地に立ちて許し難き實情でなければならぬ。そしてかゝる矛盾の發展は最早單なる都市計劃も、農村計劃も、たゞそれだけでは到底救済困難であり、どうしても一つの意圖の下にすべてのものを各々その所を得て置換へねばならぬ状態に置かれるた。従つて國土計劃への動きは自由主義の行詰りによる歴史の必然の所産でもあり、又その矛盾の中から發育した現代精神の新建設でもある。又自由主義時代に於て單なる夢想でしかなかつた農村工業化の可能性を約束し、國土計劃の根本的樞軸をなす工業分散が可能となつたことは、機械化、化學化、電化をその武器とする現代技術であり、科學である。長年經濟的支配の中に踞踏してゐた技術は、今や資本の手を離れて新しき時代の推進力である國家意圖の下に再編成され、甘んじてその懐中小刀として國土計劃の前途を支持するに至つた。更に又綜合企業といふ工場組織

の新形態は、所謂「いま、で」の機械的な工場立地を否定して、有機的な一族工業の新組織として登場し、利潤や、能率の點に於ても資本主義的工場を凌駕するに至り、あらゆる國家の意圖を實現すべき條件は満足されて來た。

かくの如き條件の有機的統一の上に國土計劃は急速に具體化し、その意圖する國防國家體制へとその巨足を進める運びとなつたのである。今や國土計劃は世界の流行であり、而もすべてこの世界不安の中に國防國家體制を意圖する點に於て世界共通である。然し此處に注意すべきことは地政學が共通でありつゝ全く異なる如く、國土計劃も亦同様に國防國家確立と言ふことに於て共通でありながら、そのこれを支配する根元の精神に於ては全く異なることである。蘇聯は既述の如く彼等の意圖する社會主義を實現せんがためであり、獨逸は民族統一乃至はその生活圏獲得の要求を満足せしめんがためである。英米は彼等の意圖する探取的秩序を維持せんがために外ならぬ。申すまでもなく我大日本帝國は八紘を蔽ひて家となす皇道を實現せんがためであり、勿論その具體的方法はこの「大御稜威」に則り、卑しくも米英的謀略であつたり、社會主義的争闘の手段であつてはならぬ。即ち大にしては「皇國の精神」に基づき民族をして各々その所を得しめんとする指導精神により、高度國防體制強化を指導原理とし、我國を中心として日・滿・華・南方を打つて一丸として自存、自榮を計り、他の廣域經濟圏と相携へて世界の平和、繁榮に貢獻すべき國家百年の大計でなければならぬ。又これを小にしては各地方計劃共に地域的に各々その所を得つゝ中心的な「大御稜威」の下に安居樂業しつゝ高度國防國家體制に歸依奉仕するものでありたい。

① 日下 藤吾 國土計劃の基礎理念

② 國土計劃 創刊特輯號發刊の辭 國土計劃研究所

(ロ) 國土計劃と地理學

國土計劃が空間的配置の計劃である限り地理學との關係は密接不可分の關係に立つ。如何に國土計劃がその意圖を實現すべき條件を整へ得たとしても、膨大なる國土の前に停む時尙ほその力の貧弱さを啣つであらう。此處に人間の力が如何に大であつても、自然に逆ふものであつてはその意圖も實現し難いのである。その意圖が雄大であればある程自然と巧みに調和せるものでなければならぬ。此處に地理學の國土計劃に貢獻すべき面がある。寧ろ「大御稜威」の下に再組織化された地理學は率先して國土計劃と提携し、進んでその計劃にあるべき基礎を與へなければならぬ。

然し地理學はそのまゝ國土計劃ではない。共にその独自の性質に應じて特定の地位と任務をもちながら根元であるべき「大御稜威」に貢獻してゐるのである。地理學はその傳家の遺産である「自然と人類との間」乃至は「國家と民族との間」等の「地人關係」をその独自の性質とし、國土計劃はその國家の意圖をこの特定の空間に配列せんとする計劃を以てその特質としてゐる。地理學の中には多くの分身があり、同族がある。夫々大御稜威の分身科學としての地理學の分身である。地理學はこの多様な分身を統轄する全體者であり、多くの分身は又地理學の有機體系の中に夫々又独自の性質に應じた特定の地位と任務により夫々中心たるべき地理學に歸依奉仕すべき有機的部分である。従つて國土計劃の工業問題に關しては地理學はその一族の工業地理學をして、農業問題に關しては又農業地理學をして夫々これに貢獻さすべきである。もとよりこれ等の一族は從來の單なる自然主義的説明科學であつてはならぬ。具體的な國土乃至は地方計劃はこれ等新しき地理學に導かれるであらう。

國土計劃の方法的原則が大陸的な求心型と、島嶼的な遠心型との二つに區分せられてゐる事實も、當然大陸、島嶼といふ地理學的基礎の上に立ちての原則であり、或は個々の地域計劃がその適當な形態をとることもその地域の地理的認識の結果である。かくの如き地理學の國土計劃への貢獻は數多くあり得る。それでこそ又地理學がその独自の性質に應じて中心に歸依奉仕すべき任務がある。地理學の組織がかくの如く有機化せられ、更に大きく國家學乃至はより根元的な「大御稜威學」とも稱すべき體系の中に再組織されてこそ、國土計劃も安んじてその任務の一部を地理學に附與するであらう。現在の如くその有機的連絡を缺ける實狀に於ては國土計劃も大負擔であり、地理學も亦不平家たらざるを得ない。少數の人達の企劃院乃至は國土局入りにとゞまらず全國の學徒は立ちて東亞の、國內の、或はあらゆる國土計劃の重要な部門の研究に突進し、その性質に應じて國家の向ふ所に歸依奉仕しなければならぬ。戦時下地理學徒の任務は正に此處に存する。

(四) 地理學變貌への道

支那事變勃發以來、一日の停滯を許さざる時局と、時局的歡迎の中に目醒しき生長を遂げた地政學、國土計劃の擡頭とは、共に地理學の中心を奪ひ去つたかの如き感があつた。僅か一、二年前迄、地理學の中心に安住して我世の春を謳歌してゐた「地誌」は、時代に忘れられた眞晝間の暗燈化して行つた。元來嵐の如く湧き立つた國民的理想の前に、まだ昔を今にして停む地理學の如きは既にその魅力を全く喪失してゐた。時代は正に未來の希望と要求

との理想に對し、さし當りその行くべき道を指向する實踐的なものへとひたむきに走つてゐた。たとへそれが守舊派の人達によつて忠實に傳統守護の大任が果されたとしても、それはたゞ一時の彌縫策に外ならず、奔流を堰き止めんとする愚かな工事に似てゐる。

地理學の眞に時代と共に生くべき道は、單なる先人の遺産の中に「素人屋」^{ソウジンヤ} 暮しを固守することではなくて、新しき時代に向つて勇敢に突入し、今日の遺産を築き上げた先人達の創業時代に歸することである。地理學は近世に於て完成されたものでも、又現代完成さるべきものでもない。然し近世地理學は既に終焉を遂げ、現代地理學は今正に興りつゝあるのである。學問は時代と共に生々發展すべきものであり、それは生物である限りに於て常に新鮮な時代の衣装を纏つて出現すべきである。過ぎ去つた時代の地理學はそれが誤りであつたといふのではなく、それはそれで過去の時代に於て十分存在價值があつたのであり、その時代の地理學として貢獻し得た筈である。「歐洲諸國舊來の地理學と雖も嘗てはその政治的經濟的發展の指針となつたのであつた。然るに世界史の推移と時代の進運とにつれ、漸くその使命を終へた時、その地理學は既に一の危機に直面してゐたのである。」即ち既にそれはなすべき一應の仕事を成し遂げたのであり、次に來るべき時代のためには既にその力を失つてゐる。西南獨逸學派の影響下に於ける地理學界の動搖は正にこの新時代を控へて古きものを整理し、新しきものを生み出すとする陣痛であつた。勿論祖先の蓄積した資本の利子で「素人屋暮し」の出來る部門もある。所謂地理學の一族として共に親戚づき合ひをして來た仲間の間にも色々である。然しその富の程度の如何に拘らず、時代は今やすべてのものに新しき出發を要求してゐる。時代に顔をそむけるものは亦時代から顔をそむけられるであらう。

新しきもの、それは若くして素朴であり、又常に不安であり勝ちである。然し蕞爾たる二葉の梅檀の新芽もやがては亭々たる巨木となるべき未來を孕む。我々は新しきものに對して尊大であつてはならぬ。源平の武士も最初から政權を握つてゐたのではない。「老人は過去を語り、青年は未來を談ず。」然し未完成な青年に對して老人に等しき註文をつけることは本來無理である。我々は共に地理學の傳統と創造、守舊と革新の中に立ち、古き傳統を失ふことなしに而も創造的であり、革新的である日本本來の基本的性格によつて地理學を變貌せしめなければならぬ。

とりも直さず地理學が現代化するためにはまづ「大御機威」に結ばれねばならぬ。それはたゞ單なる接近ではなくて、大御機威に結ばるゝことによつて、その下に再組織されることを意味する。機械的な組織をすてゝ有機的に組替へることである。中心の意圖する所をその獨自の性質に従つて受けとり、與へられたる任務を果すに適した組織に轉換するのである。言はゞ横の自律的、孤立的な機械的秩序から縦の他律的、關係的な有機的秩序に成員化するることである。

この「大御機威」の權威の下に再組織されることによつて、地理學は單なる法則探究のためでもなく、或は地域性闡明のためでもなく、全くこの大御機威のまに／＼歸依朝宗する所の一つの息吹の下に結ばれるであらう。現代の地理學は他のすべての翼賛學と同様に、この國家學乃至は大御機威學の分身であり、皇道に歸依奉仕する學問である。單なる法則探究や、地域性の闡明の如きは既に忘れられた近世の遺物であり、自由主義的殘滓である。従つて地理學は他の如何なるものゝためでもなく、大御機威のまにまに、大東亞建設、大東亞戰爭に勝ちぬき、八紘一

宇の皇道を実現せんがための地理學であることになる。我々はまづ現代地理學建設の前提であるべきこの根元の精神を明徴ならしめねばならぬ。これを正すことは方に地理學のあるべき本體を明かにし、地理學それ自體の秩序を正す所以である。地理學はこの根本精神によつてこそ孤立的、平等的な横の秩序を、夫々その分に從つて縦に再組織される筈である。

然し此處に注意すべきことは、餘りにも中心に統一することのみに急にして、地理學それ自身の独自の性質を忘れることである。地理學が他の歴史學や、倫理學と全く同一となつたのでは革新でなくて滅亡である。傳統と創造とは密接不可分の關係に立ち、傳統の中に創造を求め、創造の背後に傳統を感じる。世界の新秩序を再建すべき新しき使命に起ち上つた日本は、その最も古き歴史の中に、その進むべき道を見出してゐる。たゞ今日そうあるばかりでなく、ながき國家の歴史を通じて常に古き傳統に還りつゝ新しき歴史を創造して來たのであり、あらゆる外來文化をも亦この古き傳統の精神に基いて、之を消化し、日本化して來たのである。現代地理學の創造も亦この日本地理學の傳統の中にその基本的性格を求めねばならぬ。「平等でありつゝ不平等」であることは有機體構成の根本原則である。上、中心に向つては平等に歸依朝宗しながら、下、夫々独自の部分は各々その独自の性質に應じて不平等な任務に従事する時、始めて有機體としての活動が果される。

元來日本地理學の傳統は、本初的な國土に對する「親愛感」をその一大樞軸としてをり、この基本的性格を中心として古きものを失ふことなしに新しきものを攝取し、醇化して來た。この精神こそ「葦原中ツ國」の思想であり又支那、歐米の地理學をも咀嚼して來た態度である。我々はまづこの國土に對する「親愛感」「同胞感」に一まづ

復歸し、その後のながき地理學發育史を通じて現はれたこの感情の表現を靜かに反省せねばならぬ。新しき地理學はこの迫り來し過程の全部をたゞそれが非日本的なるの故に否定しやうと言ふのではない。あらゆる歴史時代を通じて繁榮した地理學をもその中に含み去り、一段高い立場ですべてを生かそうと言ふのである。もとよりすべてを含むことはそのまゝ鵜呑みにすることではなくて、新しき中心の下に善きをとり、惡しきを捨て、各々の独自の性質に應じて、正しきあるべき地位に結ぶことである。我々は今皇道實現の大理想の下に、このこよなき國土を中心として、東亞及世界に新秩序を建設せんとしてゐる。我等地理學徒もこの皇道の下に、も一度あの本初的な根元に立ち還り、あらゆる地理學の分野を、この樞軸の下にあるべき地位に再組織せねばならぬ。自然地理も人文地理も、將又地誌も、共にかくの如き地理學の夫々分身として再活動すべきである。更に必要に應じてはより小さな分身にも有機的に分裂し得るであらう。中心の息吹から切斷さへしなければその研究は緻密なる程望ましいのである。

かくて地理學はその一族を各々その独自の性質に應じて特定の地位と任務とを與へ、その分に從つて有機的な縦の組織を整へるであらう。此處に地理學再組織への範疇があり、現代的變貌への最初の段階が存する。豈一人地理學のみが地理學でも、國土計劃のみが我等地理學徒の分野でもない。この根本精神の下に再組織されたすべての分野は皆新しき現代地理學の一族であり、一員である。而して再組織された地理學はその膨大なる同族によつて、あらゆる分野に活動することは勿論可能ではあるが、大東亞戰下、勝ちぬくための地理學にとつて、不用不急の分野は遠慮すべきであり、専ら重點をこの戦力増強に集中し、勝ちぬくための研究に従事しなければならぬ。

組織は形式であり、如何に組織のみが整然と整へられたとしても、この組織が根本精神の下に各々その所を得て動き出さねば單なる模様替に過ぎない。そのためには研究方法が更新されなければならぬ。從來の所謂分析的方法は單にそれだけでは對象の生き／＼した真相を把束することは出来ない。然し單なる綜合も表面的になり易い。我が徳川時代の蘭學徒の多くが漢法醫學の直觀主義を捨て、實證的な「腐分け」に陶醉したことも首肯されるし、又「腐分け」のみの一方的な方法によつて人間それ自體の本質が知られないことも理解出来る。要はかゝる一方的な方法論によつてはすべては解決せられないことを意味する。新しき方法は「交互作用」の論理に立ち、これ等の兩者を止揚する全體的、綜合的なものでなければならぬ。たゞ單に自然の必然性によつて支配せられた現状のみの説明に満足することなく、進んで未來の要求と希望とに従つて「かくせねばならぬ」といふことを指示するものでなければならぬ。否寧ろ一步を進めて皇道の下、八紘一宇の大精神を實現せんがために、所謂地理學本來の綜合的研究方法に立ちその研究を深めなければならぬ。綜合的研究とは勿論單にこちや／＼と取込むのではなくて組織的形式を整へる如くに、一つの目的の下にすべてを統制し、すべての部分はその獨自の性質に應じて中心に朝宗することである。

今や地理學の一族は、全く經驗のない世界への門口に立つてゐる。その辿り行く行程も亦殆んど未知數である。如何なる障礙の前に頓坐して、如何に變貌して行くかは暫く豫斷を許さない。然し地理學は急速に變貌せねばならぬこと、その大略の道順だけは多くの先輩學問によつて示されてをり、その變貌の中心は鮮かに曠野にはためく國旗の如くに打ち樹てられてゐる。我々は全く處女地に道案内もなく、單身のり込むのではない。地政學や、國土

計劃等の同族の一部は既に一步乃至は數歩を踏み出してをり、その手近な範を示しつつある。然し我等の進むべき道は決して容易でないことはこれ等の同族先輩の動きによつても知られる。我々はこの若き青年層の決死的な努力を安價に評價し、新しきものゝもつ意味を見誤つてはならぬ。新しき地理學はどんなことがあつても建設されなければならぬのである。たとへそれが如何なる困難に遭遇しても中止してはならない。我々の同胞は大陸に、海洋に正に死闘を續け、大理想達成に邁進してゐる。我々は今こそ單なる歐米地理學のみに捉はるゝことなく、眞に日本地理學の根元に立ち還り、大所、高所に立ち、眞の意味の現代地理學を再建しなければならぬ。

① 小牧實繁著 日本地政學宣言 六六頁 弘文堂 昭和十五年

② 津久井龍雄著 傳統と創造 序文 ラジオ新書 昭和十八年

三
結
語

愈々我等の地理學發達史も四百年に亘るその概略の展望を終了してしまつた。勿論今後に来るべき多くの問題を殘してはゐるが、この邊で一應その過ぎし方をふりかへり、その動き自身の實體を尋ねて日本地理學の傳統を知り以て現代地理學創造の根柢に培はねばならぬ。

筆者は左の數項を擧げてその最後の要求に答ふると共に、以て本書の結語とする積りである。

- (1) 日本地理學發達史は大御稜威のまに／＼皇運扶翼をその使命とし、古きものを失ふことなしに新しきものを攝取醇化して生々發展する生命體であること

我々が辿り來りし概近地理學發達史は、幾多の千餘曲折を経るにも拘はらずこれを大觀すれば明かに特色ある二つの時代に區分せられる。即ちその一つは外國地理學風の模倣時代であり、他の一つは自主的地理學風の建設時代である。前者は近世地理學と呼ばれ、後者は現代地理學と稱せられる。近世は更にその時代區分に從つて、所謂徳川時代の近世と、維新以後の最近世即ち近代とに區分することが出来る。政治的にも前者は封建時代であり、後者は中央集權時代である。前者が尙ほ封建的殘滓によつて支配せられたに比し、後者は全く日本が機械的に近代化する時である。これを地理學史の上に見れば前者は支那地理學の模倣時代であり、後者は西洋地理學の輸入咀嚼時代である。共に夫々の特色と、その盛衰期とを持つてゐるが、所謂外國の模倣にあることに於ては共通である。前者に於ては「大明一統志」にその範を採り、領内の民情、風物、土産を誌し、藩政の具に供することを以てその目的とし、後者は歐米の「自然科學」を模して自然主義的認識に従事し、「獨立科學」を建設することを以てその目的

としたのであつた。

然し兩者はその統一方向を異にし、全く異質的なものであるが、共にその發生當時の現實的要求に深く根ざせるものであり、歴史的必然の結果である。徳川時代はながき中世を否定して現實的な近世の建設がその巨足を進めたるにも拘はらず、尙國家の支配的中心には凡そ近世とは對蹠的な中世的封建建度が確立したのであつた。從つて幕政の指導者達は封建的統一の思想的根柢をなす儒教を、幕學の中心に据え、時代の思想統一を策したのである。地理學も亦この政治的要求に沿ひ、「大明一統志」を模倣した所謂藩封地誌を撰し、封建的統一の具として重用したのであつた。幕府の指導者達は率先してその範を示し、上は幕府より下は一邊土の小藩に至るまで、その編纂に大童となつたのである。當初に於てはそうすることが我國を平和にする道であり、迫り來る外力に對して一時的にもせよ日本の安泰を保證することでもあつた。事實その上に約三百年の泰平が訪れ、且つこの結集されたる武力によつて歐羅巴的侵略の魔の手を逃れることが出來たのである。然しこの武力的統一とは對蹠的な現實主義的社會の發育、即ち市民社會の發達は又目醒ましく、武家社會とは又自ら異なる町人社會を形づくるに至つた。この町人社會を背景として「案内記もの」「往來もの」等の獨特なる地理書が刊行せられ、所謂「説明的地理書」の魁をなすに至つた。勿論これ等の地理書も、新興市民社會の現實的要求に根ざせるものであり、單なる思ひつきではなかつた。この方向相反せる二つの地理的作品も何時しか共に郷土自慢、お國自慢として醇化され、日本化せられてゐた。太古代我等の遠々御祖達によつて抱かれた國土に對する親近感は此處に躍如としてをり、その傳統は少しも失はれてはゐない。新しき時代の要求に從つて變貌するとしてもその根柢には一貫した傳統の背景がからみつゝいてゐる。

歐羅巴の帝國主義的侵略の魔の手はこの期の中程以後より著しく伸び、帝國の北邊及び南邊を頻りに脅かすに至つた。鎖國解禁の第一歩をなす洋書解禁と共に、多くの優秀なる地理學徒は蘭學に走り、天文學に、海洋學に、測量學にと新天地を開拓して行つた。正しくそれは地理學にとつて一つの新しき方向の現れであり、新しき時期の始まりを意味してゐた。南北より挾撃せんとする外力の壓迫に對し、地理學者は起ちて北邊を談じ、國防の急なる所以を説いた。この頃より帝國の急迫せる實狀は、更に進んで海外事情を探り、これ等外力の正體を知らんとし、この現實的要求の下に海外事情學は地理學の中心に据えられ、時代の先覺を以て任ずる人達は皆この傘下に馳せ參じた。とりもなほさずこれも國家の急迫に接してこの國土を守護せんとする國土愛の發展であり、國土に對する親近感の現れである。

明治維新は實にかゝる基礎の上に立つ日本の世界史的變貌である。急速に歐米化することは當時の日本に課せられたる任務であり、又それによつてこそ日本の飛躍すべき道が約束されてゐた。當時の指導者達によつて如何なることが企圖せられてゐたとしても自主的日本の主張のためには尙數十年の歳月を待たねばならなかつた。

初頭の熱狂的な外國事情學としての地理學の衰微の下から着實な「自然主義」的地理學の方向を指示したのは小藤博士であり、その門下生山崎博士によつてその宿願は達成せらるゝに至つた。正しく大正より昭和初年にかけてはかゝる「自然主義地理學」の大成時代であつた。徳川時代の漢法醫學が大掴みな容態によつて常に「全體的」な診斷をして來た直觀主義の反動として蘭法醫學の「腑分け」に急轉せし如く、「一統志」風の統一の中に恰も目錄然として抱へ込まれてゐた地理學の諸内容は、特定の對象を求めて限りなく分裂し始め、所謂「分析」は方法上の

寵兒として限度を知らぬ信任を以て迎へられた。地形學、氣候學、湖沼學、政治地理學、經濟地理學、交通地理學、聚落地理學、地誌學等々、凡そありとあらゆる方面にその諸分科は確立せられ、期待された地理學の自然主義化は略々完成されるに至つた。共に明治時代といふ我國に刻印づけられた歴史の宿命の命ずる展開であり、幾分の脱線氣味はあつたとしても時代の地理學の行くべき方向として極めて當然な方向であつたのである。然しこの理學化の主潮流の中にも郷土に對する親近感にその根柢を置く地誌類は消滅せず、又志賀重昂の如く眞向から國土の優秀性を高唱する學徒も存在してゐた。

世界大戰以後自然主義橫行の背後に人間主義が擡頭しつゝあつた。自然の中に捕虜化せられた人間の解放、否人間による自然の支配の時代が訪れてゐた。然し至ては一方的に偏することによつてその眞理は失はれる。全體を離れて部分なく、部分を離れて全體はない。全體即部分であり、全體は多なる部分の統一性としてあり、部分は一なる全體の多様性としてのみ存する。單なる自然主義も、偏狭なる人間主義も共に一なるものゝ多なる展開としてのみ意義がある。徳川時代の地理學も、又明治以後の地理學も同時にかゝる一つのものゝ多なる表現として統一されるべきであり、夫々その時代を脊負つて來た地理學に一應終止符をうつて再組織さるべき時が來たのである。而してこれ等多くの子に對する父の如く、形式的論理に於て相矛盾する多くの存在即ち「多」を一つに結びつけること可能なのは、三千年の歴史の現實に示さるゝ「皇道世界觀」あるのみである。「一なるもの」即「大御稜威」でなければならぬ。現代地理學はこの自主的自覺の上に出發する。この自主的自覺の上に廣く内外の展望即ち徳川時代及び明治以後の世界的地理學界の業績をその兩翼として立ち上る。それは全ての地理學說にその根源を與ふるこ

とであり、各々その所を得させることである。

之を要するに我が近代地理學史はたしかに時代と共に動き、日本の變貌と共にその新装を整へ續けてきた。徳川時代と明治時代はその衣服に於て明かに異質的であり、更に現代は又不連續である。又各時代の盛衰期を通じて仔細に點檢すればことごとくが異質的連續である。又かゝる異質的な無限發展の姿に於てこそ學問の發達があり、向上が存する。凡らく今後もかゝる變貌は繰返されるであらう。然し既述の如く幾變轉を通じてその變化する根柢に一貫せるものが常に脈搏つてゐる。學說史の變化は單なる時代の新装であり、新しき時代に處すべき「身のふり方」である。勿論徳川時代の地理學も、明治時代の地理學も、將又現代の地理學も共に日本地理學である。正しく日本地理學は過去に完成しつくされたのでも、又現代完成しなければならぬものでもなくて、永久に生成發展する生命である。その發展の中心は「國家のため」であり、「生成發展」する「國家」に歸依奉仕するためである。即ち常に之を再組織する中心は國家の意志であり、政治的な現實的要求である。我々が辿り來りし近代地理學發達史の變貌毎に繰返されたのはこの概念であつた。藩封地誌も一藩の政治を通じて國家安定に寄與せんとする企てであり、幕末志士の地理學說も亦内憂外患に直面して國家に對する叫びであつた。もとより維新の外國事情にしろ、自然主義的地理學にしても國家百年の發展ならざるはない。國家發展にとつて有害であり、又國家の意圖せざる「眞の意味に於て」地理學の變貌の企てられたことがないのである。國家發展のためには彼等が傳家の秘法として繼承して來た形式をサラリと捨て、新しきにつく我等の發達史の展開はおそらく他國に見られない現象であらう。支那の地理學統があくまでも傳統の中に固執し、新しき内容をも尙ほ古き形式に盛らんとする傾向や、歐米の地理學統が單

なる眞理のために「國家」を忘却するのと較べて著しき相違である。さればこそ地理學は常に時代の先端に起ちて啓蒙的な役割に従事して來た。幕末地理學がそうであり、維新の外國事情にしろ、現代の地政學にしろ皆その軌を一にしてゐる。國家が漸く固定したレールの上を走り續ける頃となればあらゆる學說も跳梁し、必ずしもかゝる傳統が常にその全面を統制してゐるのではない。然し國家の一旦緩急に際しては常にそれが公式でもあるかの如く、全生命をかけてこの「永遠なるもの」に従はんとするのである。全くそれは國家危急に際して、色なき光に接し、聲なき音を聽きて、この永遠的なものに觸れて歪れるを正して來た「斷續史」である。これこそ我等の地理學發達史を一貫する「日本的性格」として明瞭に抽出することが出来る最大の特徴である。我々はこの日本地理學史の傳統を忘れてはならぬ。

(2) 日本地理學史は世界地理學史であること

既述の如く近代地理學發達史に収録せられたる學說は實に多岐である。それは東洋地理學の粹を蒐めたる支那地理學を始めとし、近世初頭の泰西地理學の序幕を切つたイベリヤ半島や、和蘭の地理學より、英、米、獨、佛等凡そありとあらゆる國々の地理學が荷上げされてゐる。勿論それは「世界」の名を冠すべき空間的擴がりをもち、正しくその名に恥ぢない。岡倉天心の「日本は、アジア文明の博物館」なるのみならず、正しき世界文明の博物館であり、世界地理學の信託倉庫である。其處にはあらゆる時代の、又あらゆる國々の地理學が陸揚げせられ、繁殖すべき地盤を見出したのであつた。而もこれ等の陸揚物はその當座の混亂時代を過ぐればやがてそのあるべき位置に

安定せしめられる。とりもなほさずかゝる配列的秩序の中心は「日本的なもの」即ち「皇道」である。多なるものあらゆる國々の地理學說にその各々あるべき地位を與へて、これを統合するのがこの「皇道」である。その意味に於て皇道こそあらゆるものゝ結びの父であり、母である。雑多なるものも此處に結ばれて始めて統一される。此處に至つて始めて皇道は多なる地理學の一であり、多なる地理學はこの一なるものゝ多なのである。この同一の息吹を感ずるに至ることは「日本化」せられることであり、普通の用語に従へば「消化」である。實に我國こそあらゆる地理學の「幸ふ」國であり、各々その所を得て伸び行く國である。然し卑しくも日本にその繁榮の地盤を見出さんとすれば、まづ「日本化」せられねばならぬ。所謂近代精神の名の下にすべてを一色に塗りつぶし、「日本的」なるものをも地方的なものとしてその下風に統一せんとした「普遍的」「世界的」等の用語も結局一面的立場にすぎず、やがて傳統的な「日本的判斷」の前にその正體を暴露し、その正當な地位に待遇せられるに至りつゝある。元來認識論的に客觀界は先驗的に存在するものではない。主觀が中核となつて始めて構成される存在界である。客觀をしてあらしめるには、必らず主觀の統一作用乃至は構成作用がなければならぬ。然してその統一作用の中心が我々にとつては「皇道世界觀」なのである。それは決して一面的世界への手がかりとしてではなく、形式論理の世界に於ては矛盾する如き多くの存在を一つに各々その所を得て結びつけるのである。

かくして日本は所謂「古きもの」を失ふことなしに新しいものを歓迎する「不可思議な國」である。かゝる發展を生々發展」と呼び、「攝取醇化」と稱へる。地理學も例外ではない。今や戰國の昔よりこの國の濱邊に波打ちしあらゆる國々の攝取せられたる地理學が醇化せられつゝある時である。やがてそれは全く整頓せられ、一つの體系の中

に新秩序を以て構成せられ行くであらう。日本こそ、吾日本地理學こそ正に世界地理學の「御統の玉」である。

① 岡倉天心著 東洋の理想 八頁 創元社 昭和十四年

(3) 日本地理學の當面の課題

學問の發達にフリクションの伴はぬ場合はまづない。學說史家はかゝる對立を通じて發展が存すると信じてゐるものもある。平面的な秩序の中に於てはかゝる論理にも一應の眞理がある。所謂フェーヴルの言葉はその意味に於て味ふべきである。即ち「新しい^①科學が彼等の自律性を意識し、そして彼等の自由にして獨立な生存權を要請してくるとき、彼等は占有者のない障礙物の一掃された土地をあて育ち行くのでは決してない。然るに、彼等は自分達の最初の諸發見に酔ひ、自分達の最初の獲物に感嘆して、慎重さを缺き、往々にして節度を失ふ。彼等は靜止する所を知らず、彼等の征服欲を制御することを知らず、彼等の成長の熱を鎮靜することを知らない。それがために彼等は既に地位を占めてゐる先輩の諸科學や、或は又發展の途上にある後輩達から抗議を招く様になる。」と。正しく自由競争の世界に於ける新興學問の發達すべき道はかくの如き運命の下に慘酷なる抗議を受けねばならぬ、かゝる統制なき學問の世界に於ける結末は普通個々の「力」によつて決せられる。従つて強力なる「力」こそその榮枯盛衰を司る鍵である。

新日本地理學もかくの如き運命の絆に結びつけられた泡沫的存在であらうか。多くの同列と考へられる先輩學問や、後輩學問の抗議の前に所謂「鬭争」の過程を経過しなければならぬものであらうか。

然らず。新日本地理學の行くべき道はかゝる孤立的、自律的な學問への再編成ではない。かゝるすべてのものゝ根柢に存在し、すべてのものをして各々その所を得せしめ、各々その階に安せしめる「皇道」に結ばれ、そのあるべき地位を得て、独自の職分を通じてこの中心に歸依奉仕すべき新地理學への變貌である。かゝる地理學は單なる水かけ論や、「力」によつて得らるべきではない。勿論執拗なる反對や、抗議に對しては「神武」を以て對抗するであらう。然しそれはその本旨ではない。何處までもそれは殲滅ではなくして、各々その所を得せしめるものでなくてはならぬ。新日本地理學はあらゆる國々の、あらゆる立場の地理學をして、そのあるべき位置に安定せしめ、各々中心に向つて歸依奉仕すべき地理學の建設である。かゝる地理學こそ現實に直面せる日本の眺望せる地理學であり、變貌すべき日本地理學の第一の課題でなければならぬ。そのためにまた既成地理學は「中心」を發見しなければならぬ。「皇道」に結ばれねばならぬ。より徹底してこの「皇道」に出發しなければならぬ。かくすることによつて維新以來王座の地位を占め來りし「獨立科學」としての自律性も、徳川時代の「一統志」的な政治性も共にその當然の地位に復歸せしめらるべく、かくしてあらゆる部門は「皇道」の分身として、各々その独自の職分を通じて、中心に歸依奉仕するであらう。自己の學問こそが、自己の學說こそが最も合理的な地理學であるとする「平面的」統一の時代は既に古典的遺物である。あらゆる部門は今こそ一體的な組織の中に於て各々その全體一分を盡くすべきの時である。一つの息吹の下に統制された全ての部門が各々その独自の性質に従つて歸依奉仕すべき時である。

①フエーゲル著 飯坂浩二譯 「大地と人類の進化」 六四頁 岩波文庫

以上は筆者の純近地理學發達史の結論である。もし時代が異なり、人が異なつたなら或は多少異なる結論に導かれたかも知れぬ。時代によつて、或は人によつてその向ふべき方向が幾分具體的に異なるからである。さりながら、それは餘り大きな問題ではない。眞の意味の結論は時により、人により異なるべきではなく、たゞ具體的な方向は異なるとしても餘り大きな問題ではない。たゞそれは現在、我國の直面する現實に於て正しきか否かである。學說史の展望はたゞ過去が如何にありしかの「眞實」を描くことのみを以て終點とすべきではなくて、今後如何にあるべきかを示す事を以てその終局目的としなければならぬ。その意味に於て筆者の企てはあながち徒爾とは思はれない。

最後に筆者の勞作に對して多くの参考と示唆とを與へられた傍記論文及著述に對し萬腔の敬意を拂ふと共に長時間筆者と共に地理學思想の遍歴に従はれた讀者に對して深甚の感謝を捧ぐる次第である。

以上

KI-214-92

昭和十八年八月二十日 印刷
昭和十八年八月三十日 發行
(1100部)

出版會承認
い100517號

昭和四年度立正大
學地理歴史科卒、
目下大阪第二師範
學校教授
『日光附近の地誌』
『國民學校案によ
る國民科地理』等
の著書その他の研
究あり、

◁・▷

日本を中心とする輓近地理學發達史

送料 十五錢
定價 二圓八十錢
特別行爲稅相當額 七錢
合計賣價 二圓八十七錢

著者 山口 貞

發行者 大阪市東區內久寶寺町四ノ三五
大成 一

印刷者 大阪市南區東區町九地
朝尾 仙吉

印刷所 大阪市南區東區町九地
濟美堂印刷部
(西大一〇八〇番)

發行所

大阪市東區內久寶寺町四ノ三五
濟美堂
電話 東五三二〇番
振替大阪一六九八一番

配給元 東京都神田區淡路町二丁目九地 日本出版配給株式會社

會員番號一一四〇五四番

終